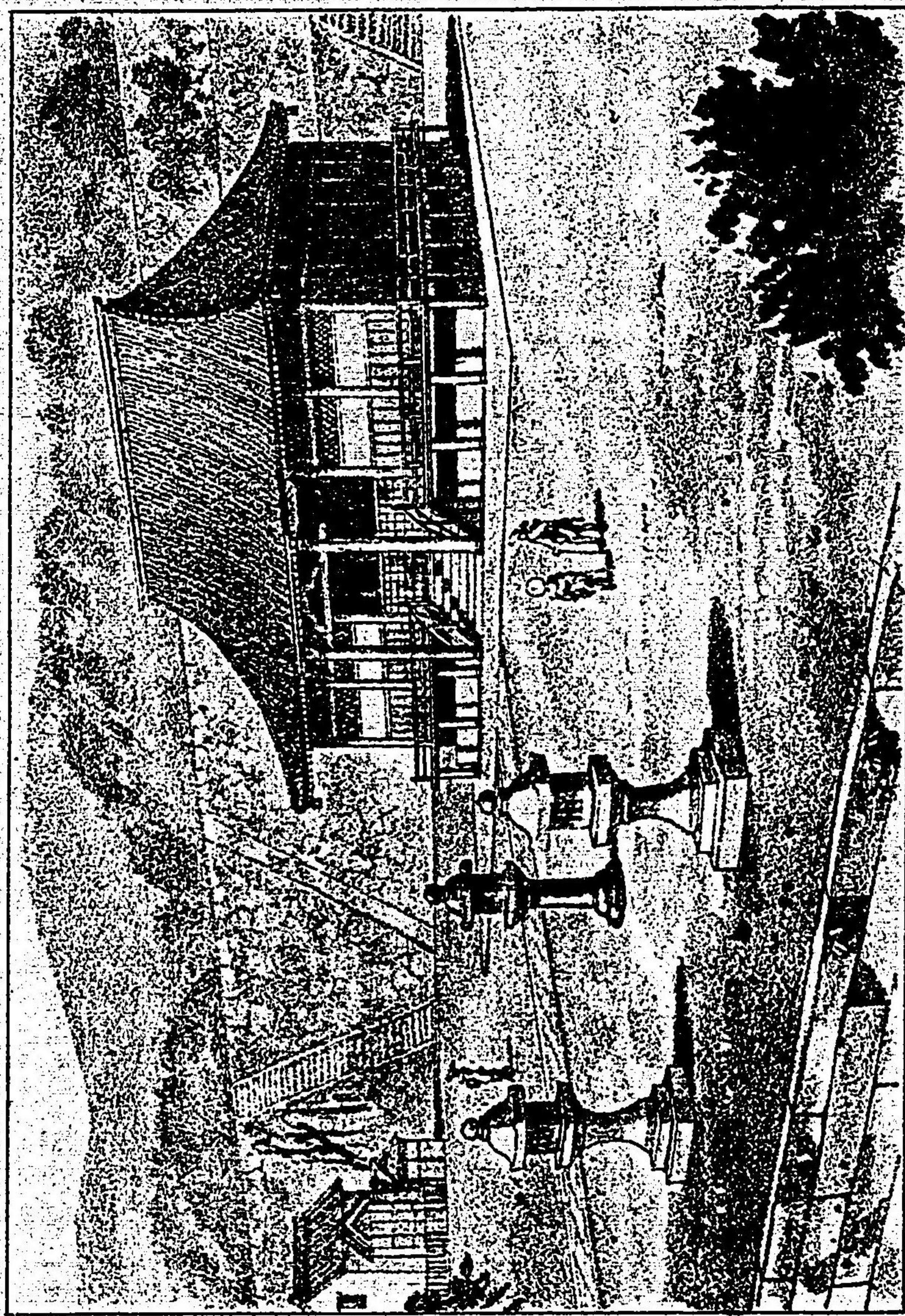


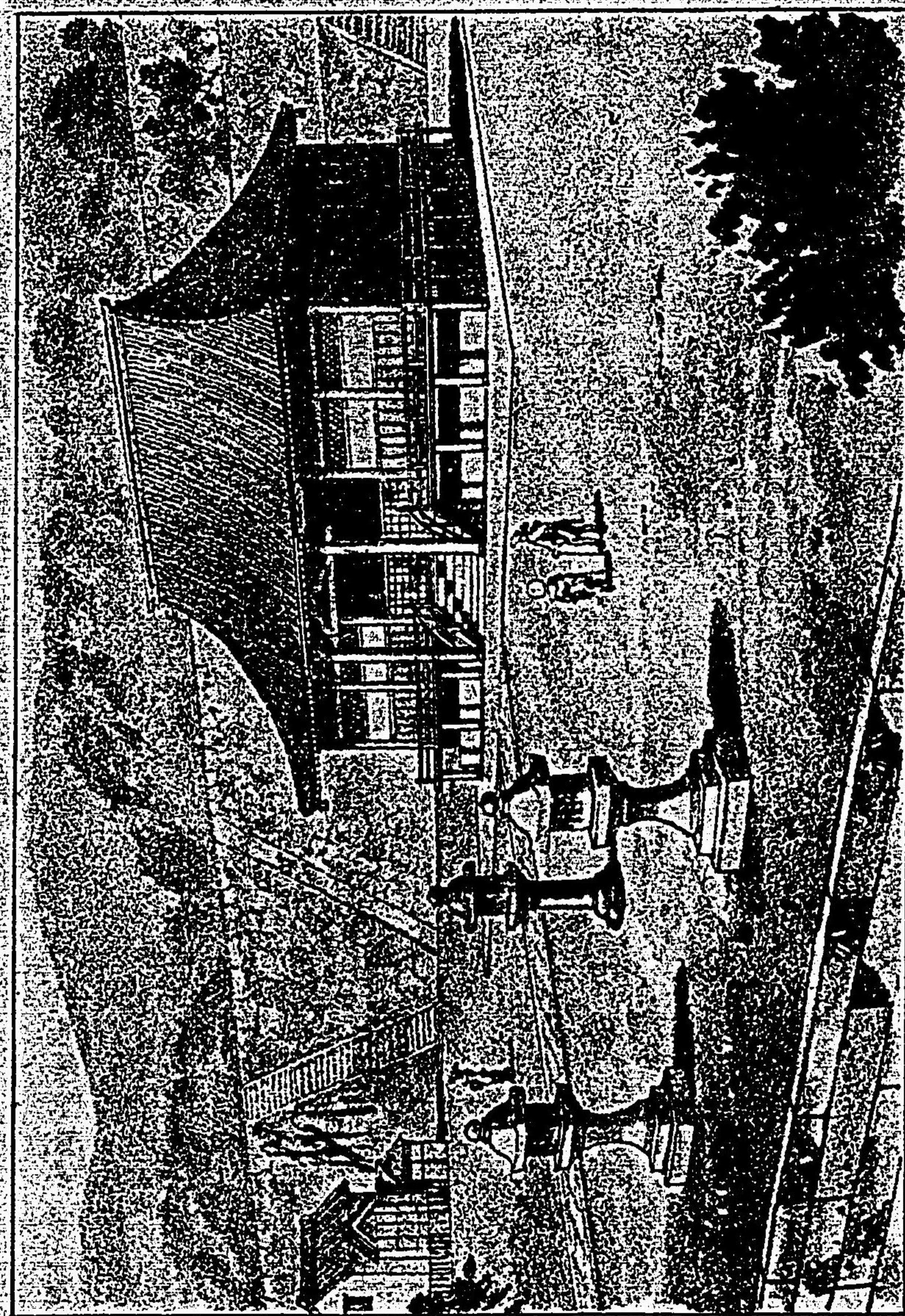
由國赤中口巻津津中口寺之景



ばざるものあらん其後人皇七十八代 後白河法皇承安元年熊野權現の神託に依
て自から巡禮を行し玉ふ是れより日に月に盛に行はる終に御還宮の砌當山ハ巡
禮根本の靈場實に三十三度由緒の寺なりとて一尊に十一面各々三尊に三十三是
れ西國禮利の本尊の標幟なりと國內の名匠鎌倉の運慶に課して二軀の十一面觀
音の像を寄せ玉ふ今の左右脇士則ち是れなり誠に惟れば將來衆生の願力を成就
し或は病根重疾諸種の業厄を抜き一切の煩惱を除き速かに佛果を遂げしめんが
爲めに皇太子前身に刻み玉ふ衆生有縁の靈像を奉し殘せる寺なれば澆季末世の
今に向んくとして吾觀瞻仰の類は現得を眼前に蒙り禮拜恭敬して至信に名號
を唱ふる者は永く三惡道を離れ菩薩所に生ずべし現在にあつては周遍法界の功
徳に酬ふて長壽富貴の利益に預るべきなり

第二十五番 播磨國加東郡鳴川村 御嶽山清水寺

抑も當山開基法道仙人ハ中天竺摩訶陀國鷄足山中に住して金剛摩尼の法を成就
し飛行自在の徳を得て須臾に十方の刹土に遊行して衆生を化度し其壽命もまた



ばざるものあらん其後人皇七十八代 後白河法皇承安元年熊野權現の神託に依
 て自から巡禮を行し玉ふ是れより日に月に盛に行はる終に御還宮の御當山へ巡
 禮根本の靈場實に三十三度由緒の寺なりとて一尊に十一面各々三尊に三十三是
 れ西國禮利の本尊の標幟なりと國內の名匠鎌倉の運慶に課して二層の十一面觀
 音の像を寄せ玉ふ今の左右脇士則ち是れなり誠に惟れば將來衆生の願力を成就
 し或は病根重疾諸種の業厄を抜き一切の煩惱を除き速かに佛果を遂げしめんが
 爲めに皇太子前身に刻み玉ふ衆生有縁の靈像を奉し残せる寺なれば澆季末世の
 今に向んくとして吾儕瞻仰の類は現得を眼前に蒙り禮拜恭敬して至信に名號
 を唱ふる者は永く三惡道を離れ菩薩所に生ずべし現在にあつては周遍法界の功
 徳に酬ふて長壽富貴の利益に預るべきなり

第二十五番 播磨國加東郡鳴川村 御嶽山清水寺

抑も當山開基法道仙人ハ中天竺摩訶陀國鷄足山中に住して金剛摩尼の法を成就
 し飛行自在の徳を得て須臾に十方の刹土に遊行して衆生を化度し其壽命もまた

無量歳なり一時紫雲に乗じて鷄足の洞を出で震旦三韓等の諸國を經吾朝王城の
 西播丹攝の三國四郡の境なる此峯に來住して佛法東漸の期を待ち玉ふ頃ハ人皇
 十二代 景行天皇の御宇なりき天皇法道仙人の來住することを聞し召しこの山
 を仙人に與へ玉ひしより名を御嶽山とは稱しけるに然かるに人皇十五代
 神功皇后三韓征伐の時住吉明神の告げにより勅使を以て此山へ勝軍の祈願を命
 ぜらる仙人勅命に應じて仙法を修行し懇懇に祈念せられければ種々奇瑞ありて
 凱陣あらせられ大に仙法不思議の徳を叙感ありける其後人皇三十代 欽明天皇
 の御宇佛法初めて我が朝に東漸しければ仙人一の佛宇を草創して清水寺と名け
 ちる蓋し此山の曾て水に乏しきを以て仙人水神に勸請し玉ひしに忽ち一條の清
 水湧出して大雨にても増さず大旱にても減せず八功德の靈水とも稱すべきにや
 參詣の人々頭に酒で頭痛を治し眼に瀧て眼病を癒せしむ等奇瑞著しき靈水ある
 によるとぞ又 推古天皇三十五年勅願ありて金堂を造營し玉ひければ仙人自か
 ら一刀三禮して十一面觀世音及び毘沙門天王吉祥天女の像を彫刻せられしに點
 眼の時水像慶讃して却て仙人を禮謝し玉ふと云ふかゝる不思議の尊像なれば秘



寺水清州播

無量歳なり一時紫雲に乗じて鶴足の洞を出で震旦三韓等の諸國を經吾朝王城の
 西播丹攝の三國四郡の境なる此峯に來住して佛法東漸の期を待ち玉ふ頃ハ人皇
 十二代 景行天皇の御宇なりき天皇法道仙人の來住することを聞き召しこの山
 を仙人に與へ玉ひしより名をは御嶽山とは稱しけるとが然かるに人皇十五代
 神功皇后三韓征伐の時住吉明神の告げにより勅使を以て此山へ勝軍の祈願を命
 ぜらる仙人勅命に應じて仙法を修行し懇懇に祈念せられければ種々奇瑞ありて
 凱陣あらせられ大に仙法不思議の徳を叙感ありける其後人皇三十代 欽明天皇
 の御宇佛法初めて我が朝に東漸しければ仙人一の佛宇を草創して清水寺と名け
 らる蓋し此山の曾て水に乏しきを以て仙人水神に勸請し玉ひしに忽ち一條の清
 水湧出して大雨にても増さず大旱にても減ぜず八功德の靈水とも稱すべきにや
 參詣の人々頭に酒で頭痛を治し眼に灌て眼病を癒せしむ等奇瑞著しき靈水ある
 によるとぞ又 推古天皇三十五年勅願ありて金堂を造營し玉ひければ仙人自か
 ら一刀三禮して十一面觀世音及び毘沙門天王吉祥天女の像を彫刻せられしに點
 眼の時木像慶讚して却て仙人を禮謝し玉ふと云ふかゝる不思議の尊像なれば秘

おまじりや
 かま
 形ふま
 水



播州清水寺



龜敬重して是れを安置し諸人の拜禮を禁ぜらる其後又 聖武天皇御願ありて大講堂を建立し玉ひ行基菩薩の彫刻し給へる本尊千手觀音及び毘沙門天王地藏菩薩の兩脇士を安置し燈明料として但馬國下鶴井莊を賜ふ是れ即ち西國二十五番の靈利とはなれり其他 後白河法皇は常行堂を御建立あらせられ祇苑女御へ大塔を池の二位殿は藥師堂源の右大將は阿彌陀堂を造營せらるゝ等或は病氣平癒の加被を謝し或は敵軍退治の冥助に報ひ玉ふ等みな是れ本尊の威靈にして現當二世の巨益あるに依らざるはなし

第二十六番 播磨國加西郡下里村 法華山一乘寺

當寺本尊千手大悲の像は法道仙人天竺より持ち來る靈像なり當山の開基も則ち法道仙人大化元年に之を開き人皇三十七代 孝徳天皇白雉元年に建立すと案するに往古天竺に五百の持明仙人あり金剛摩尼の法を修して皆よく神通力を得て須臾に十方の國々に遊ぶ事自在なり已に遊ぶに飽かば又直ちに本處へ歸る神通自在にして壽命も亦無量なり能く人天を利益す法道仙人も其中の一人なり我が



法華山一乘寺

龍敬重して是れを安置し諸人の拜禮を禁ぜらる其後又 聖武天皇御願ありて大講堂を建立し玉ひ行基菩薩の彫刻し給へる本尊千手観音及び毘沙門天王地藏菩薩の兩脇士を安置し燈明料として但馬國下鶴井莊を賜ふ是れ即ち西國二十五番の靈利とはなれり其他 後白河法皇は常行堂を御建立あらせられ祗苑女御の塔を池の二位殿は藥師堂源の右大將は阿彌陀堂を造營せらるゝ等或は病氣平癒の加被を謝し或は敵軍退治の冥助に報ひ玉ふ等みな是れ本尊の威靈にして現當二世の巨益あるに依らざるはなし

第二十六番 播磨國加西郡下里村 法華山一乘寺

當寺本尊千手大悲の像は法道仙人天竺より持ち來る靈像なり當山の開基も則ち法道仙人大化元年に之を開き人皇三十七代 孝徳天皇白雉元年に建立すと案するに往古天竺に五百の持明仙人あり金剛摩尼の法を修して皆よく神通力を得て須臾に十方の國々に遊ぶ事自在なり已に遊ぶに飽かば又直ちに本處へ歸る神通自在にして壽命も亦無量なり能く人天を利益す法道仙人も其中の一人なり我が

日本に來りて播州の山に遊ぶ其山の形八葉にて谷より五色の光明を放つ仙人見
 て靈地なるを知り降て居住し常に法華經を誦し又は密觀を修す所持の道具は千
 手大悲の銅像佛舍利寶鉢のみにして餘は一物もあることなし一日忽ち多門天王
 雲に駕して來て曰く善哉大仙人久しく此山に住し玉へ我れ當に正法を守護し國
 家を鎮撫すべしと法道は常に千手の寶鉢の法を悉知し天龍鬼神も來住して奉事
 す又彼の鉢を飛して人の供養を受く空鉢仙人と云ひける故に生石の大明神歸
 依あつて鉢を石上に置き玉へ供を仕らんと宜ふ今其所を空鉢塚と名く即ち神祠
 の西南にあり 孝徳天皇大化元年の秋八月船師藤井某禁中の御上納米を船に積
 みて播磨灘を過ぐ法道鉢を飛して供米を乞ふ時に藤井が曰く是れは禁中の御膳
 米なり私に供する事を得ずと云ひけれハ鉢は空しく又飛び歸る然るに船中の米
 彼の鉢の歸ると共ふ隨て飛行く事さながら雁行の如し藤井大に驚き急ぎ法華山
 に至り種々と謝して止まざりければ法道笑て曰く早く船に還るべし米は直ちに
 戻さんものと言ひ終れば數多の米俵又前の如くに飛歸る不思議といふも餘り
 あり其米の中一俵南の河の上に落つ其處を米墮村と云ふ今に富家共多しとかや

春の花
 秋の葉
 法乃那山



法華山

日本に來りて播州の山に遊ぶ其山の形八葉にて谷より五色の光明を放つ仙人見
て盤地なるを知り降て居住し常に法華經を誦し又は密觀を修す所持の道具は千
手大悲の銅像佛舍利寶鉢のみにして餘は一物もあることなし一日忽ち多門天王
雲に駕して來て曰く善哉大仙人久しく此山に住し玉へ我れ當に正法を守護し國
家を鎮撫すべしと法道は常に千手の寶鉢の法を悉知し天龍鬼神も來住して奉事
す又彼の鉢を飛して人の供養を受く空鉢仙人と云ひける故に生石の大明神歸
依あつて鉢を石上に置き玉へ供を仕らんと宣ふ今其所を空鉢塚と名く即ち神祠
の西南にあり 孝徳天皇大化元年の秋八月船師藤井某禁中の御上納米を船に積
みて播磨灘を過ぐ法道鉢を飛して供米を乞ふ時に藤井が曰く是れは禁中の御磨
米なり私に供する事を得ずと云ひければ鉢は空しく又飛び歸る然るに船中の米
彼の鉢の歸ると共ふ隨て飛行く事さながら雁行の如し藤井大に驚き急ぎ法華山
に至り種々と謝して止まざりければ法道笑て曰く早く船に還るべし米は直ちに
戻さんものと言ひ終れば數多の米俵又前の如くに飛歸る不思議といふも餘り
あり其米の中一俵南の河の上に落つ其處を米墮村と云ふ今に富家共多しとかや

春の花

かみまき

秋の草

いづれ
妙なる

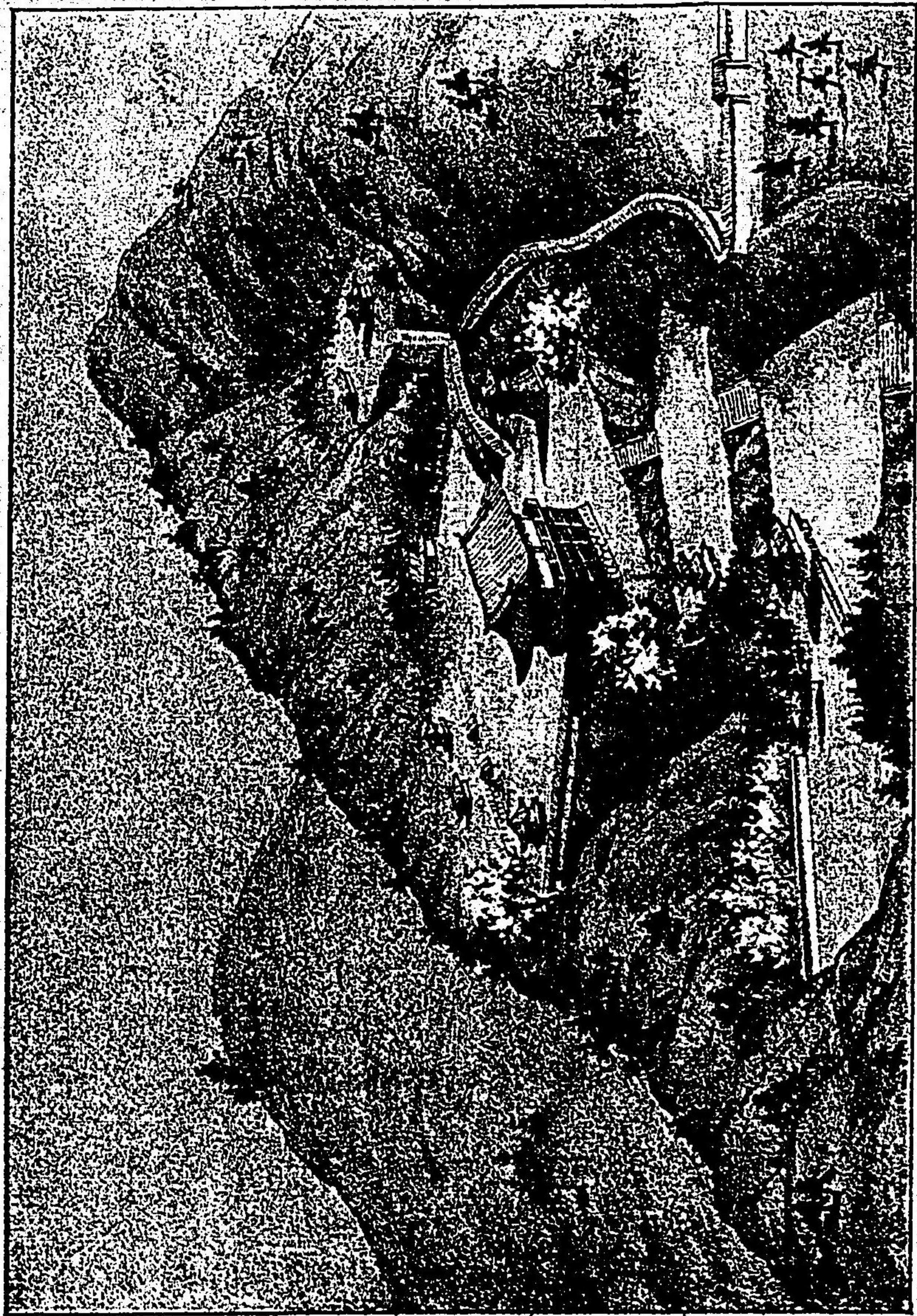
法乃那

山



法華山

由國傳廿六卷播磨法華山入之真景



又は其邊の田を米田と號す藤井都に至り右の次第を奏聞しければ帝ことに感じ玉ひける同五年五月の頃帝御惱甚だ重くして藥石効あらず諸寺諸山に祈願あれども曾て驗なし公卿申上げ急ぎ法道仙人を召して加持せしむるに忽ち玉體平癒し玉ひければ大臣公卿皆々大に悦び禮拜せり禁中留ること一七日佛法の要義を開演し玉ふに君臣皆讚伏せすと云ふことなし後に山に歸るに及んで勅して伽藍建立の大施主となり玉ひ白雉元年九月に成就す天子自から法華山に行幸ありける其後法道山に居住すること數十年一日衆に告げて曰く我れハ本耆闍崛山に住む身なりしか暫く此に來て誘導するのみなり今正に歸るべしと即ち偈を説て曰く我化有情來此地留下像鉢舍利羅一涉斯境得所求永出三途見佛陀といひ終りて身より大光明を放て雲中に飛び入ると云へり尙靈驗數多あれども冗長を恐れ爲めに書さず

第二十七番

播磨國飾西郡曾左村

書寫山圓教寺

書寫山圓教寺相似門院は往昔村上天皇の御宇康保年間開祖性空悉知菩薩瑞氣



法華山に於ける法華寺の山門

又は其邊の田を米田と號す藤井都に至り右の次第を奏聞しければ帝ことに感じ玉ひける同五年五月の頃帝御惱甚だ重くして藥石効あらず諸寺諸山に祈願あれども曾て驗なし公卿申上げ急ぎ法道仙人を召して加持せしむるに忽ち玉體平癒し玉ひければ大臣公卿皆々大に悦び禮拜せり禁中留ること一七日佛法の要義を開演し玉ふに君臣皆讚伏せすと云ふことなし後に山に歸るに及んで勅して伽藍建立の大施主となり玉ひ白雉元年九月に成就す天子自から法華山に行幸ありける其後法道山に居住すること數十年一日衆に告げて曰く我れハ本耆闍崛山に住む身なりしか暫く此に來て誘導するのみなり今正に歸るべしと即ち偈を説て曰く我化有情來此地留下像跡舍利羅一涉斯境得所求永出三途見佛陀といひ終りて身より大光明を放て雲中に飛び入ると云へり尙靈驗數多あれども冗長を恐れ爲めに書さず

第二十七番

播磨國飾西郡曾左村

書寫山圓教寺

書寫山圓教寺相似門院は往昔村上天皇の御宇康保年間開祖性空悉知菩薩瑞氣

の導くに從ひて此山に登り鷲嶺上を分ち鷄足雲を送るの靈告を受け玉ひし草創
 なり添くも 花山法皇開祖の徳業を敬慕して二たび鳳翥を拵げさせ玉ひ殿堂の
 規則大に備りて終に顯密弘通の靈刹とすなれりけるそがなかに今の本堂と稱す
 るはもと文殊菩薩開祖に告示し玉ふ靈地の一つにして本尊は昔天人常にあま
 たり巖の上に立てる櫻木を禮して髻首生木如意輪能滿有情福聚願亦滿往生極樂
 願一切衆生心所念といふ偈を唱へて拜せしを開祖上人是れをきと玉ひ櫻木即ち
 如意輪觀自在尊なることをしるし召して即ち天工毘首羯磨の化身安鎮行者に仰
 せて彼の靈櫻を巖の上にたてながら六臂如意輪の尊像を彫ませ玉ふに異鳥忽ち
 來り囀り嘉みする聲を聞き玉ふに
 なにもみないとはぬ山の草木には阿耨菩提の花が咲くらん
 と囀りけるしかる後生木如意輪の威光普天を灑やかせ利生世に勝れて開へけれ
 を 後白河 後醍醐の兩帝も行幸まじくして法教の遺風を崇尊し玉ふと後か
 ちず或時寛和帝書寫山へ御幸ありて上人と御對面の際密かふ書工をして上人の
 像を寫さしめ給ひしに俄かに山鳴り谷動きて恐ろしきこといはん方なし法皇大

けり
 乃ち
 書
 山
 松の
 心
 み



寺寫書

の導くに從ひて此山に登り鷲嶺上を分ち鷄足雲を送るの靈告を受け玉ひし草創
 なり添くも 花山法皇開祖の徳業を敬慕して二たび鳳翥を拵げさせ玉ひ殿堂の
 規則大に備りて終に顯密弘通の靈刹とぞなれりけるそがなかに今の本堂と稱す
 るはもと文殊菩薩開祖に告示し玉ふ靈地の一つにして本尊は昔天人常にあまく
 たり殿の上に立てる櫻木を禮して替首生水如意輪能滿有情福聚願亦滿往生極樂
 願一切衆生心所念といふ偈を唱へて拜せしを開祖上人是れをき玉ひ櫻木即ち
 如意輪觀自在尊なることをし召して即ち天工毘首羯磨の化身安鎮行者に仰
 せて彼の靈櫻を殿の上にたてながら六臂如意輪の尊像を彫ませ玉ふに異鳥忽ち
 來り啼り落みする聲を聞き玉ふに

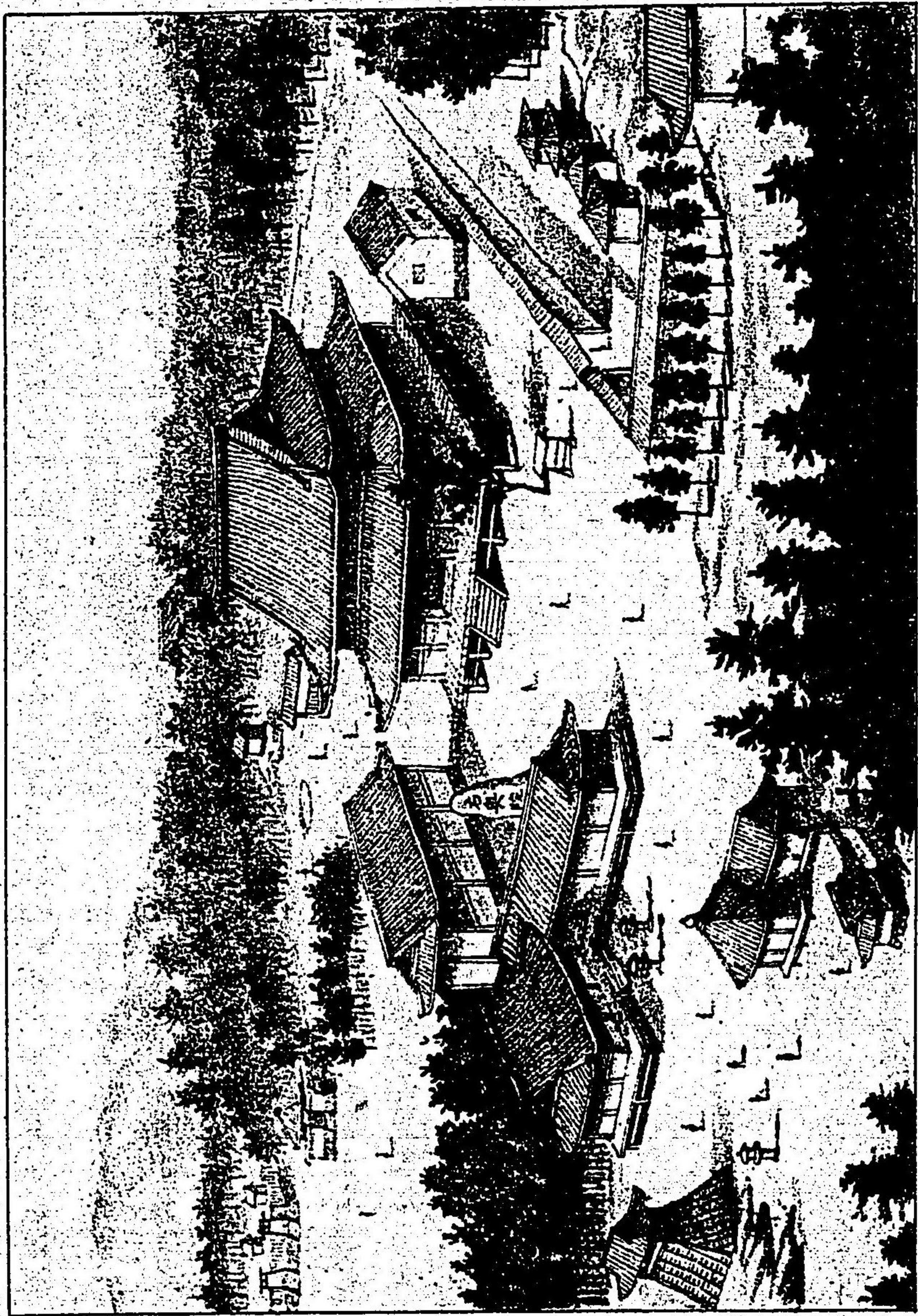
なにもみないとはぬ山の草木には阿耨菩提の花ぞ咲くらん
 と啼りけるしかる後生水如意輪の威光普天を輝やかせ利生世に勝れて聞へけれ
 を 後白河 後醍醐の兩帝も行幸ましめて法教の遠風を崇尊し玉ふると淺か
 らず或時寛和帝書寫山へ御幸ありて上人と御對面の際密かふ書工をして上人の
 像を寫さしめ給ひしに俄かに山鳴り谷動きて恐ろしきこといはん方なし法皇大



みみ
 なる

松の
 山
 書

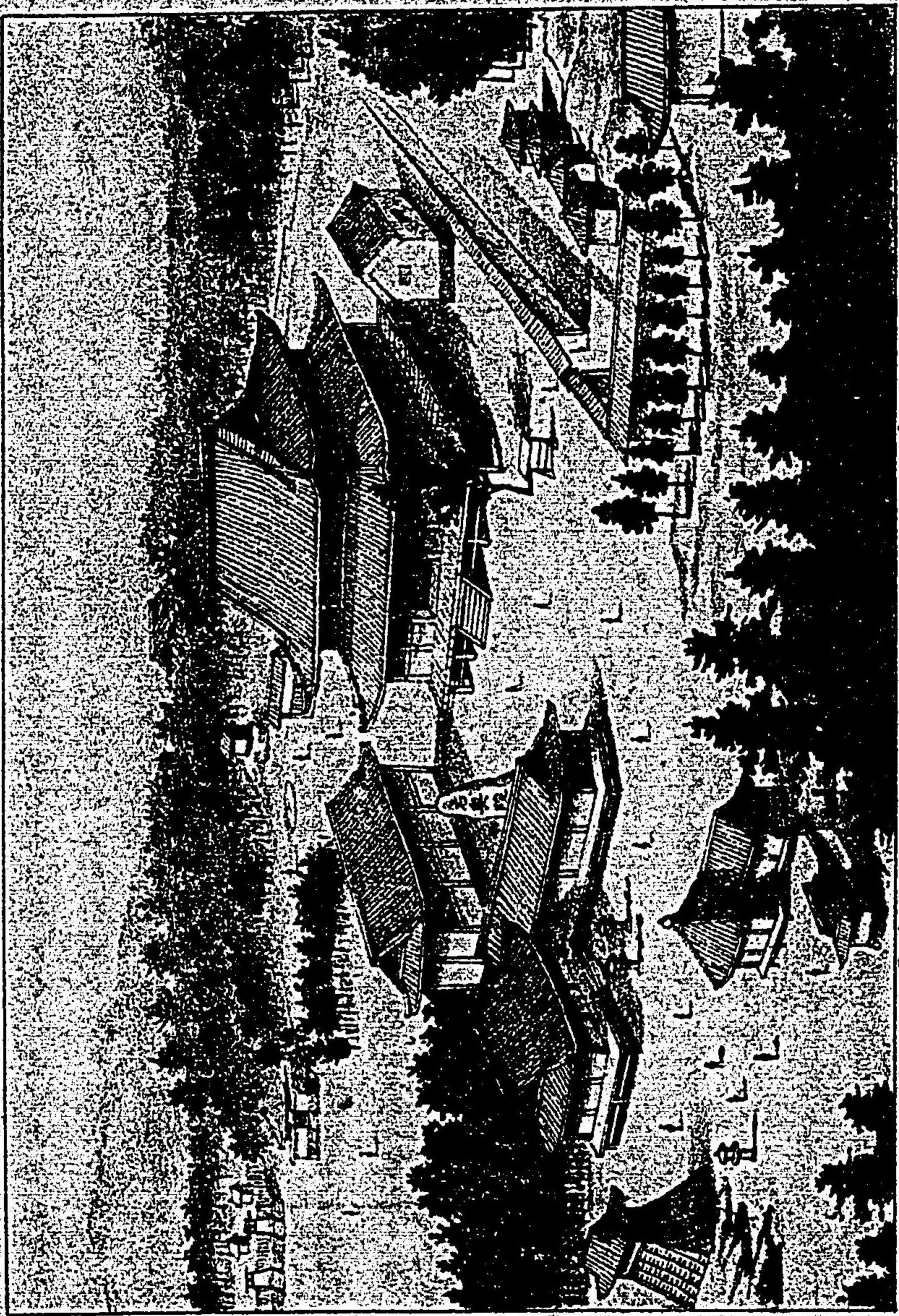
寺寫書



に驚怖し玉ふに上人微笑を帯び玉ひ怪む勿れ是れ我が像を寫し玉ふ故なりと申されける又上人の御顔に小さき痣ありしを畫工心付かず圖さざりしが彼の震動の折餘りのことに驚きたるまゝ持ちたる筆を取り落せしに其墨點恰も上人の痣ある處へ畫かれけるに人皆感嘆したりしとぞ此畫ハ今猶ほ當寺の寶藏にありといへり是れより先き造營御再建の勅命を賜り伽藍費を並へ善美盡さる所なし彼の文殊靈告の中にいへらく山をは書寫と名く峯をば一乗と號す此山を踏む者は菩提心を發し此峯によづる者は六根淨を清むと示しける靈告空しからずして上人既に六根清淨を得玉へば信心結縁のものは必ず巨益を得むこと疑ひを容れざるなり

第二十八番 丹後國與謝郡府中村 世野山成相寺

當寺は人皇四十二代 文武天皇の御宇慶雲元年九月十一日の夜當寺開山眞應上人の御夢に一人の化僧來り告げて曰く此所は聖觀音の靈地なり汝正に宜しく伽藍を建立して普く世の衆生を濟度すべしと示し玉ふと見て夢覺めたり上人教の



丹後國與謝郡府中村 世野山成相寺

に驚怖し玉ふに上人微笑を帯び玉ひ怪む勿れ是れ我が像を寫し玉ふ故なりと申されける又上人の御顔に小さき痣ありしを畫工心付かず圖さざりしが彼の震動の折餘りのことに驚きたるまゝ持たたる筆を取り落せしに其墨點恰も上人の痣ある處へ書かれけるに人皆感嘆したりしとぞ此畫ハ今猶ほ當寺の寶藏にありといへり是れより先き造營御再建の勅命を賜り伽藍費を並へ善美盡さる所なし彼の文殊靈告の中にいへらく山をは書寫と名く峯をば一乗と號す此山を踏む者は菩提心を發し此峯によづる者は六根淨を清むと示しける靈告空しからずして上人既に六根清淨を得玉へば信心結縁のものは必ず巨益を得むこと疑ひを容れざるなり

第二十八番

丹後國與謝郡府中村

世野山成相寺

當寺は人皇四十二代 文武天皇の御宇慶雲元年九月十一日の夜當寺開山眞應上人の御夢に一人の化僧來り告げて曰く此所は聖觀音の靈地なり汝正に宜しく伽藍を建立して普く世の衆生を濟度すべしと示し玉ふと見て夢覺めたり上人教の

如く山岳に登りて深く靈地を尋ね玉ふに平垣苑も砥の如く靈香四方に薫じ紫雲
 虚空にたなびきたるの地を見出し頻に欣喜し玉ふ處へ忽然として一老翁現じ玉
 ひ上人に謂て曰く我れ汝を待事久し今當に觀音の尊像を授くべし汝これに仕へ
 て怠るゑと勿れとありて忽ち雲に乗じて去り給ひぬ時に上人奇異の思ひ晴れや
 らず不圖傍を見玉へば辱くも正觀音安坐し給ふその尊像よりは光輝を放ち四下
 眩惑きばかりにて上人を照し玉ふ上人深く歡喜の涙を流し玉ひ心中只管敬禮あ
 りて尊像を負ひ奉り山を下り里ふ出て件の利益を示し玉ひ懇々里人を教化し玉
 ふに四方の道俗坐るに淨心を起しつゝ上人に力を戮して形の如く伽藍を建て彼
 の本尊を安置し奉る其後養老二年の冬降雪天に夥しく積て四方の道を絶し物購
 ふことをも得ず上人食を盡し玉ひ今や飢渴に及ばれける時何處ともなく鹿來り
 て忽ち庵の前に斃れぬ上人これを見玉ふに正しく三種の淨肉なりけれを即ち鹿
 の股を裂きて早速これを喫し玉ふ其味ひいふべからず身心共に氣力を生じ盛な
 ること常に異らず雖て口中を清く嗽ぎ本尊を拜し玉ふにこは开も如何に勿躰な
 くも本尊の御股には切り裂きたる疵口ありて鮮血流れ出づること恰も生身に於

幸ふの喜

移るの喜

かりあれ

風ふさわ

あふゆ

三



寺相成

如く山岳に登りて深く靈地を尋ね玉ふに平垣宛も砥の如く靈香四方に薫じ紫雲
 虚空にたなびきたるの地を見出し頻に欣喜し玉ふ處へ忽然として一老翁現じ玉
 ひ上人に謂て曰く我れ汝を待事久し今當に觀音の尊像を授くべし汝これに仕へ
 て怠るゑと勿れとありて忽ち雲に乗じて去り給ひぬ時に上人奇異の思ひ晴れや
 らず不圖傍を見玉へば辱くも正觀音安坐し給ふその尊像よりは光輝を放ち四下
 眩惑きはかりにて上人を照し玉ふ上人深く歡喜の涙を流し玉ひ心中只管敬禮あ
 りて尊像を負ひ奉り山を下り里ふ出て件の利益を示し玉ひ懇々里人を教化し玉
 ふに四方の道俗坐るに淨心を起しつゝ上人に力を戮して形の如く伽藍を建て彼
 の本尊を安置し奉る其後養老二年の冬降雪天に夥しく積て四方の道を絶し物購
 ふことをも得ず上人食を盡し玉ひ今や飢渴に及ばれける時何處ともなく鹿來り
 て忽ち庵の前に斃れぬ上人これを見玉ふに正しく三種の淨肉なりけれを即ち鹿
 の股を裂きて早速これを喫し玉ふ其味ひいふべからず身心共に氣力を生じ盛な
 ること常に異らず嚙て口中を清く嗽ぎ本尊を拜し玉ふにこは开も如何に勿躰な
 くも本尊の御股には切り裂きたる疵口ありて鮮血流れ出づること恰も生身に於

幸ふよ音

ねむひま

おろわれ

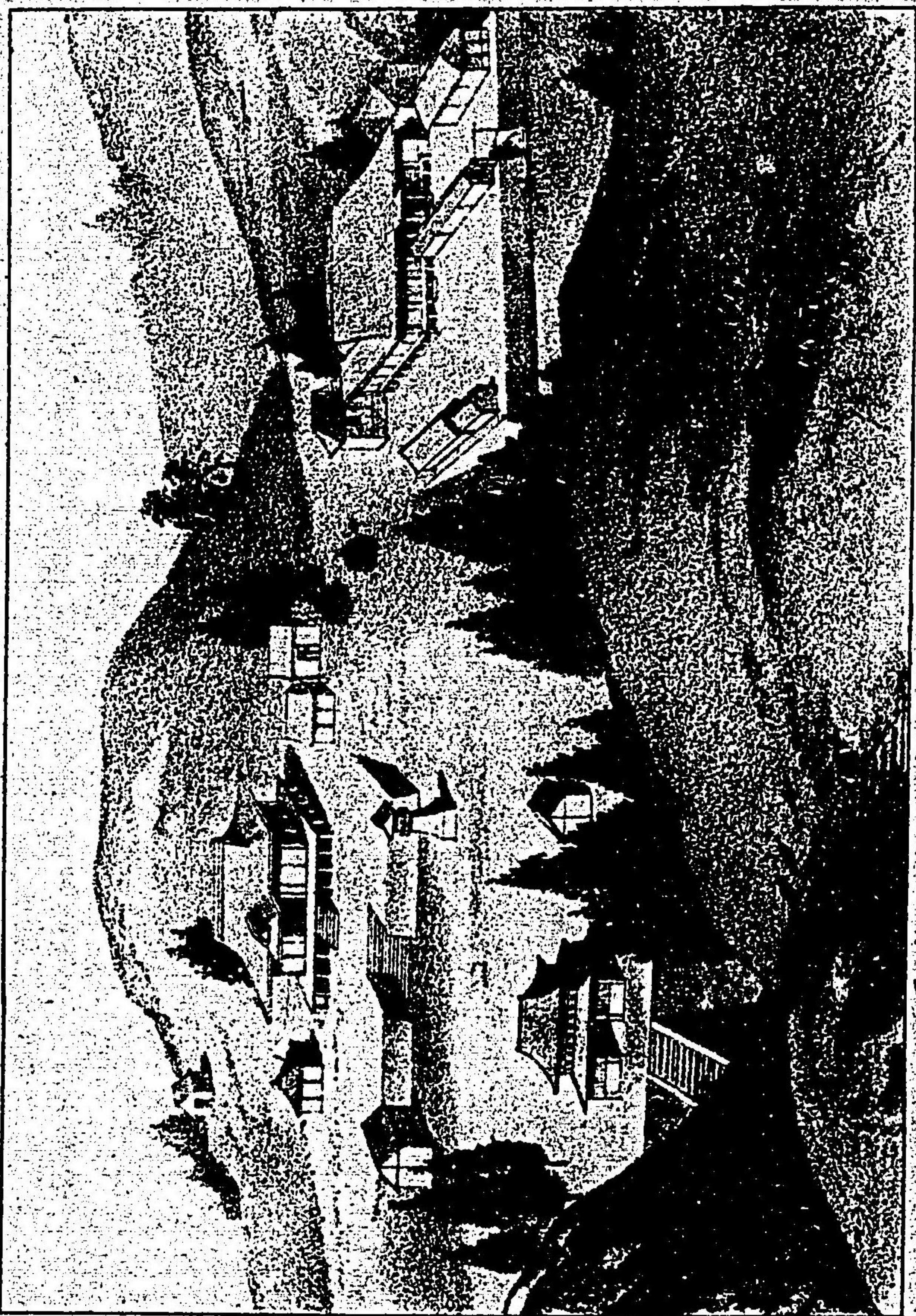
風ふらわ

あふれ

三



寺相成



けるが如し上人大に驚き玉ひあれや全く本尊の我れが飢渴を救へんとて一時御影を鹿に現じ玉ひしならんあら難有き御恵み哉又さりとは悲しき御有様やと頻りに喜憂の泪に咽ばれ靈時ありて懺謝の念誦切なりけるに不思議なる哉靈像の御疵口は見る間に癒て少しも痕を停めずなりぬ爾してより後本尊の靈験日々新たにして不思議の利益を蒙るもの幾千萬人といふを知らず遠近の通俗歩を運ぶ者多ければ山内常に市をなす加之のみならずこの事上聞に達しければ幾程もなく文武天皇御叙威の餘り寺號を成相寺と下し賜ふて勅願寺となし玉ひしと其餘の靈験利生の如きは舉ぐるに遑あらざるなり

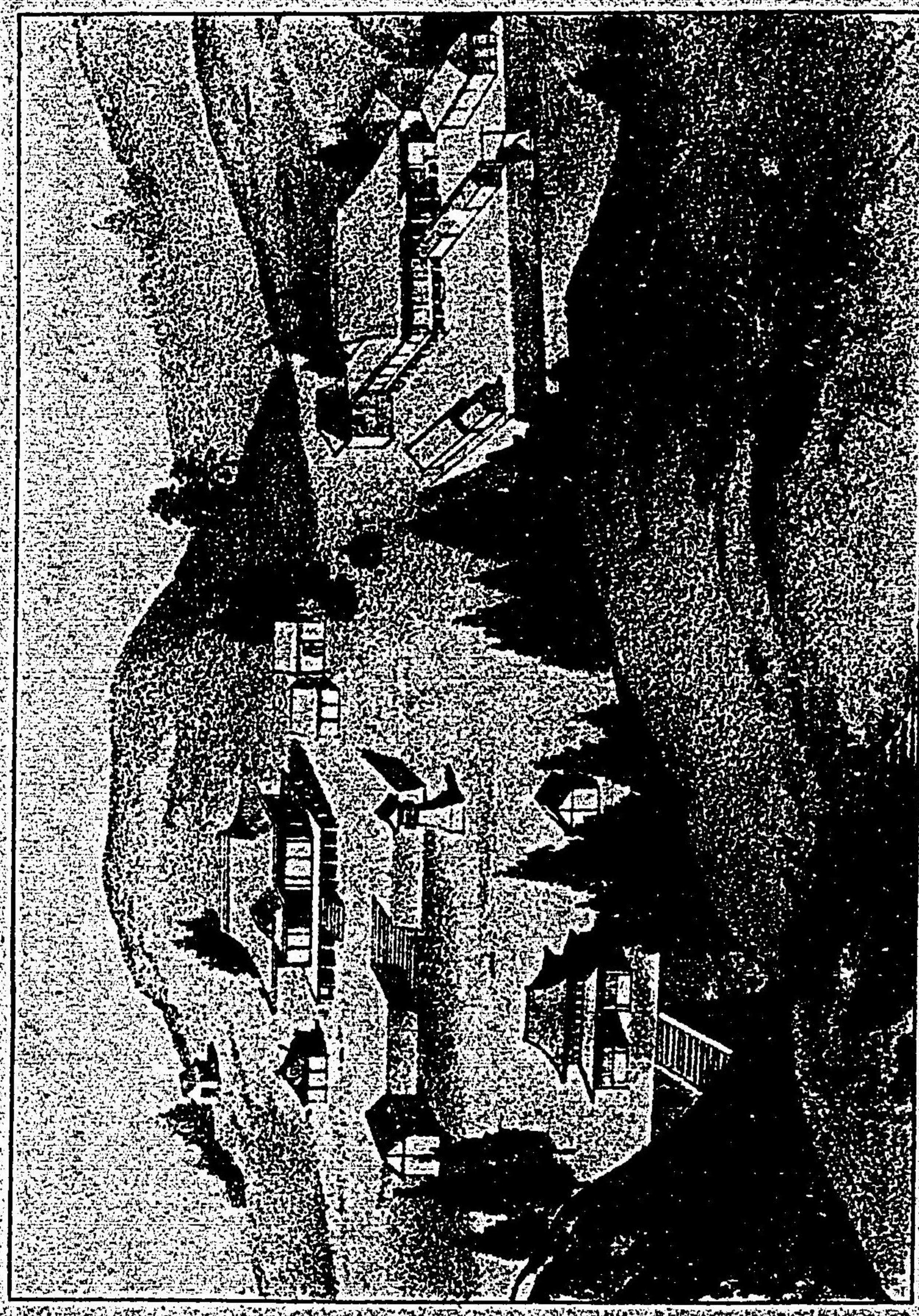
第二十九番

丹後國加佐郡志樂村

青葉山松尾寺

抑も當山は馬頭觀世音菩薩の出現し玉ふ靈峰にして元明天皇の御建立乃ち西國卅三所に無比の御本尊なり其初めを原るに慶雲年中道公威光上人なる大徳あり名山勝地を探て丹波の國に入り玉ふの時遙かに當山二峯の雲上に秀るを望み見て曰く山形何んぞ馬耳に似たるやこれ必ず靈場なちんと行くに路なく問ふに

由緒古くは八幡宮あり後成相寺と名す



けるが如し上人大に驚き玉ひるれや全く本尊の我が飢渴を救へんとて一時御影を鹿に現じ玉ひしならんあら難有き御恵み哉又さりては悲しき御有様やと頻りに喜憂の泪に咽ばれ雲時ありて懺悔の念誦切なりけるに不思議なる哉靈像の御疵口は見る間に癒て少しも痕を停めずなりぬ爾してより後本尊の靈験日々新たにして不思議の利益を蒙るもの幾千萬人といふを知らず遠近の通俗歩を運ぶ者多ければ山内常に市をなす加之のみならずこの事上聞に達しければ幾程もなく文武天皇御叙感の餘り寺號を成相寺と下し賜ふて勅願寺となし玉ひしと其餘の靈驗利生の如きは擧ぐるに遑あらざるなり

第二十九番 丹後國加佐郡志樂村 青葉山松尾寺

抑も當山は馬頭觀世音菩薩の出現し玉ふ靈峰にして元明天皇の御建立乃ち西國卅三所に無比の御本尊なり其初めを原るに慶雲年中道公威光上人なる大徳あり名山勝地を探て丹波の國に入り玉ふの時遙かに當山二峯の雲上に秀るを望み見て曰く山形何んぞ馬耳に似たるやこれ必ず靈場ならんぞ行くに路なく問ふに

人をき深林幽谷の中に猛獸を驅り榛荆を拓き辛苦を極めて稍く當山に攀ぢ登り
 玉へば山腹平坦にして溪泉清く流れ境地幽邃中に千年の松鬱々森々たるものあ
 り上人この蟠根に倚りて草坐を設け法華經を誦し玉へば幽かに雲間より舞儀音
 樂を奏する聲聴こへて微妙の度限りなし五人時に不思議の念ひに堪へず正眼を
 照して仰ぎ見玉へば數多の天人彼の千歳の松に影向し彩雲深く籠り光明斜めに
 輝けり上人愈々道心を澄まし是れ正しく菩薩出現の瑞相なりと一心頂禮し玉ふ
 に果せるかな御丈四寸八分閻浮檀金の馬頭觀世音を感得し玉ひ大ひに驚き且つ
 喜び大喝一聲して曰く嗚呼世尊茲に幾世を経玉ひしごと直ちに千歳松の下に萬
 朶を構へ草庵を結び安置し奉り日々香花を捧げて恭敬供養し玉へること爰に年
 あり時に和銅五年 元明天皇御感まし〜て藤原武智磨に勅し堂塔伽藍を建立
 せしめ玉ひ山院寺名皆千年松の瑞相に基き青葉山松尾寺と名づく實に山の形も
 馬頭に似て法爾自然の普陀洛淨土なり尋で養老年間越智泰澄大士來て住し益ま
 す開基の業を繼ぎ玉ひ特に 聖武天皇の勅を奉じ當山絶頂に妙理大權現を勸請
 して御累代勅願修法の壇場を築き即ち勅額を掲げて曰く清淨結界勅願道場と是

其の瑞相也
 千歳松
 松尾の寺



西國九丹後松尾寺

人なき深林幽谷の中に猛獸を驅り榛荆を拓き辛苦を極めて稍く當山に攀ち登り
 玉へば山腹平坦にして溪泉清く流れ境地幽邃中に千年の松鬱々森々たるもの
 り上人この蟠根に倚りて草坐を設け法華經を誦し玉へば幽かに雲間より舞儀音
 樂を奏する聲聽こへて微妙の度限りなし五人時に不思議の念ひに堪へず正眼を
 照して仰ぎ見玉へば數多の天人彼の千歳の松に影向し彩雲深く籠り光明斜めに
 廻り上人念々道心を澄まし是れ正しく菩薩出現の瑞相なりと一心頂禮し玉ふ
 に果せるかな御丈四寸八分閻浮檀金の馬頭觀世音を感得し玉ひ大ひに驚き且つ
 喜び大喝一聲して曰く嗚呼世尊茲に幾世を経玉ひしごと直ちに千歳松の下に萬
 朶を構へ草庵を結び安置し奉り日々香花を捧げて恭敬供養し玉へること爰に年
 あり時に和銅五年 元明天皇御感まし〜て藤原武智磨に勅し堂塔伽藍を建立
 せしめ玉ひ山號寺名皆千年松の瑞相に基き青葉山松尾寺と名づく實に山の形も
 馬頭に似て法爾自然の普陀洛淨土なり尋で養老年間越智泰澄大士來て住し益ま
 す開基の業を繼ぎ玉ひ特に 聖武天皇の勅を奉じ當山絶頂に妙理大權現を勸請
 して御累代勅願修法の壇場を築き即ち勅額を掲げて曰く清淨結界勅願道場と是

其の瑞相也

其の瑞相也

其の瑞相也

千とあま

に

松の尾の寺



寺尾松後丹春九九國西

由國宗古元香丹後松尾寺之景



れ二教の一山にして本寺支院合せて六十五坊寺領は四千石なり(舊記に載せて昭々たり)泰澄大士御所持の大錫杖水瓶の二器今尙ほ存す

永延三年 花山院法皇には中納言義懷卿左中辨惟成卿を従がへ西國御巡禮あらせられ當山即ち千歳松及び開山威光上人を御追想の餘り口號み玉ひし御歌に

そのかみは幾世へぬらんたよりをば千歳もここに松の尾の寺

と又 一條天皇の御宇正暦五年丹後の國鴻の浦に結城宗太夫なる者あり其浦邊の長にして慈善の志ざし深く村民を恵み常々當山觀世音を信仰し觀音經を讀誦せしが時に秋八月の頃天氣和かにして海面清く澄み渡りければ漁夫等十七艘と海上遠く漕出し争ふて網を下し獵獲の多きに從ひ我れを忘れて漁りけるが忽ち遙かに黒雲一點の生ずるあり瞬く間に天に滔こり颶風鳴渡つて萬雷の如くに響き白浪天を衝て起り其高きこと幾丈といふを知らず漁船は萬里に吹き散され舞ひ掀ること木葉よりも軽く須臾に樁を折り又槳を推き船は元よりいふ迄もなく岩に觸れては裂るやら前後左右に覆へり彌々命の助かるゝ術もなければ只吾れ一に泳ぎ出てゝその萬一を希はんと簑笠を捨て衣類を脱ぎ裸となつて逆浪を衝



白雲寺の御宇正暦五年丹後の國鴻の浦に結城宗太夫なる者あり其浦邊

れ二教の一山にして本寺支院合せて六十五坊寺領は四千石なり舊記に載せて昭々たり泰澄大士御所持の大錫杖水瓶の二器今尙ほ存す
 永延三年 花山院法皇には中納言義懷卿左中辨惟成卿を従がへ西國御巡禮あらせられ當山即ち千歳松及び開山威光上人を御追想の餘り口號み玉ひし御歌に
 そのかみは幾世へぬらんたよりをば千歳もこゝに松の尾の寺
 と又 一條天皇の御宇正暦五年丹後の國鴻の浦に結城宗太夫なる者あり其浦邊の長にして慈善の志ざし深く村民を恵み常々當山觀世音を信仰し觀音經を讀誦せしが時に秋八月の頃天氣和かにして海面清く澄み渡りければ漁夫等十七艘と海上遠く漕出し争ふて網を下し獵獲の多きに從ひ我れを忘れて漁りけるが忽ち遙かに黒雲一點の生ずるあり瞬く間に天に滔こり颯風鳴渡つて萬雷の如くに響き白浪天を衝て起り其高きこと幾丈といふを知らず漁船は萬里に吹き散され舞ひ掀ること木葉よりも軽く須臾に樁を折り又槳を搥き船は元よりいふ迄もなく岩に觸れては裂るやら前後左右に覆へり彌々命の助かるゝ術もなければ只吾れ一に泳ぎ出てゝその萬一を希はんと篋笠を捨て衣類を脱ぎ裸となつて逆浪を衝

きて死地をば遁れんと身は磯にも異らず沈んで又浮び浮んで又沈む千峰險へ盡せば萬峰重なり茲に哀むべき漁夫等は悉く海底の藻屑それが悪魚の餌となり果てぬ時に獨りの宗大夫は漸く其身を脱れ得て一つの島に漂ひ寄り岩を擲で這上り始めて土を踏むを得て茲に少しく安堵を得たるこれに引かへ故郷の方には一村の婦女老幼日々濱邊に相集り母は其子を待ては泣き妻は夫を求めて哀み小兒は父を呼び叫ぶ死骸を尋ねぬ斗りにて夜とも晝とも分ちあく只に涙の流れ川喩へがたなき悲歎の有様なりける倍其宗大夫は彼の島に寄るを得て是れや世にいふ羅刹國人道の未だ開けずして其野蠻極まるをいふなりならんとは神ならぬ身の知るよしなく先づ喜びの眉を皺く折しも彼方此方より群り来る鬼女怪物爪牙を張り悪眼を以て取り圍む其形さへ姿さへ怖ろしなんといふばかりなし宗大夫は偏に當山を念じ日夜一心に南無觀世音助け玉へと本誓を懇み或遇惡羅刹毒龍諸鬼難等の經文を唱へければ不思議なるかな空中ふ微妙の聲あり告げ玉はく今汝が信力感ずるに餘りあり速かに冥助を施し救ふべしと宗大夫御告げに驚き伏し拜めば白馬飛び來て嘶ける是れや即ち御冥助ならんと其馬に打ち乗り手綱も

共に鬚首を抱けば白馬直ちに南に向ひ萬里の波濤を蹴り去つて迅速故郷の濱邊に歸る家は悲歎限りなく既に日を経て百ヶ日追善供養の折節なれば親戚もろとも馳せ到り不測の思ひに消魂し問ふも語るも暇なく宗大夫始めて夢の覺めたる心地して俱々白馬の行衛を踪して當山に登れば御堂の庭前に至て蹄跡を失し唯に巨大なる靈木の横るを見るあるのみ己れが眼前冥助を蒙りたりし白馬こそ即ちこれなる靈木にてありけるかと先づ本尊を禮拜し奉るに御手に彼の馬の手綱を持ち玉へり宗大夫彌々感涙肝に銘じ直ちに髪を削り入道して名を光心と改めつ遂に觀音行者となり日夜一心に觀音經を讀誦し誓て此靈木を以て本尊大像を造り奉らんとれさく思ひを凝らしける時に一條天皇の御聞に達し勅して靈木を以て觀世音大像を彫刻せしめ密に千歳松出現の秘佛を此御胸の内に納め玉へり宗大夫には益々佛天冥護の厚きに感激し終身敬禮怠らずして目出度大往生を遂げたりといふ且つ元永年間鳥羽天皇及び美福門院當山伽藍を御再造の事且つ惟尊僧正屢々觀世音の靈託を受け來て住せられ中興開基の名ある事降て織田氏兵亂の時寺領を失して伽藍の衰頽を極むる事尋で天正九年細川幽齋公當國

に領主たるの日改めて寺領山林を寄附する事等舊記書録に詳かなりと雖も長文を恐れて今は略しぬ實に茲に幾世を経て物換り星移るもかわり玉はざる本尊の靈驗は日に新にして月に盛へ引くとはなしに總て世の一切衆生を濟度し玉ふは經に所謂弘誓深如海。歷劫不思議ならざらんやは

因に記す 夫れ馬頭觀世音菩薩は馬頭明王とも稱し奉り蓮華部諸尊の教命輪一切觀音の忿怒身にして威力最も盛なり内に菩薩の大慈悲を秘し外に明王惡魔降伏の姿を現す其秘法に曰く無明の煩惱を啜食し衆生の恐怖を摧破す加之畜生殘害之苦患を抜き菩提涅槃の果海に導く此尊の功力専ら餘尊に勝れ玉へりと總て人間の身に在る所の苦患は皆明王の忿怒威力に依り現世の利益速かなるを示す且つ愚痴の人畜生業の多きを憐れみ即ち六道の中畜生道の能化尊となり頂きに白馬を載せ玉へり畜生の中にて馬は吉祥尊貴あり白は自性清淨にして染着なきの色を表す故に能く愚痴執着の畜生業苦を抜き菩薩と明王との兩位を兼玉ふて過去現在未來の三世を一見にし三面八臂印相持物等の尊貌ハ深理玄妙にして内心大悲の溢れ出たる標識なれば猥りに説くに恐れ

月七日
竹生島
竹生島
竹生島



竹生島

三十番

に領主たるの日改めて寺領山林を寄附する事等舊記書録に詳かなりと雖も長文を恐れて今は略しぬ實に茲に幾世を経て物換り星移るもかわり玉はざる本尊の靈驗は日に新にして月に盛へ引くとはなしに總て世の一切衆生を濟度し玉ふは經に所謂弘誓深如海。歷劫不思議ならざらんやは

因に記す 夫れ馬頭觀世音菩薩は馬頭明王とも稱し奉り蓮華部諸尊の教命輪一切觀音の忿怒身にして威力最も盛んなり内に菩薩の大慈悲を秘し外に明王惡魔降伏の姿を現す其秘法に曰く無明の煩惱を啜食し衆生の恐怖を摧破す加之畜生殘害之苦患を抜き菩提涅槃の果海に導く此尊の功力専ら餘尊に勝れ玉へりと總て人間の身に在る所の苦患は皆明王の忿怒威力に依り現世の利益速かなるを示す且つ愚痴の人畜生業の多きを憐れみ即ち六道の中畜生道の能化尊となり頂きに白馬を載せ玉へり畜生の中にてても馬は吉祥尊貴なり白は自性清淨にして染着なきの色を表す故に能く愚痴執着の畜生業苦を抜き菩薩と明王との兩位を兼玉ふて過去現在未來の三世を一見にし三面八臂印相持物等の尊貌ハ深理玄妙にして内心大悲の溢れ出たる標識なれば猥りに説くに恐れ

月一日七

竹生島

竹生島

竹生島

竹生島

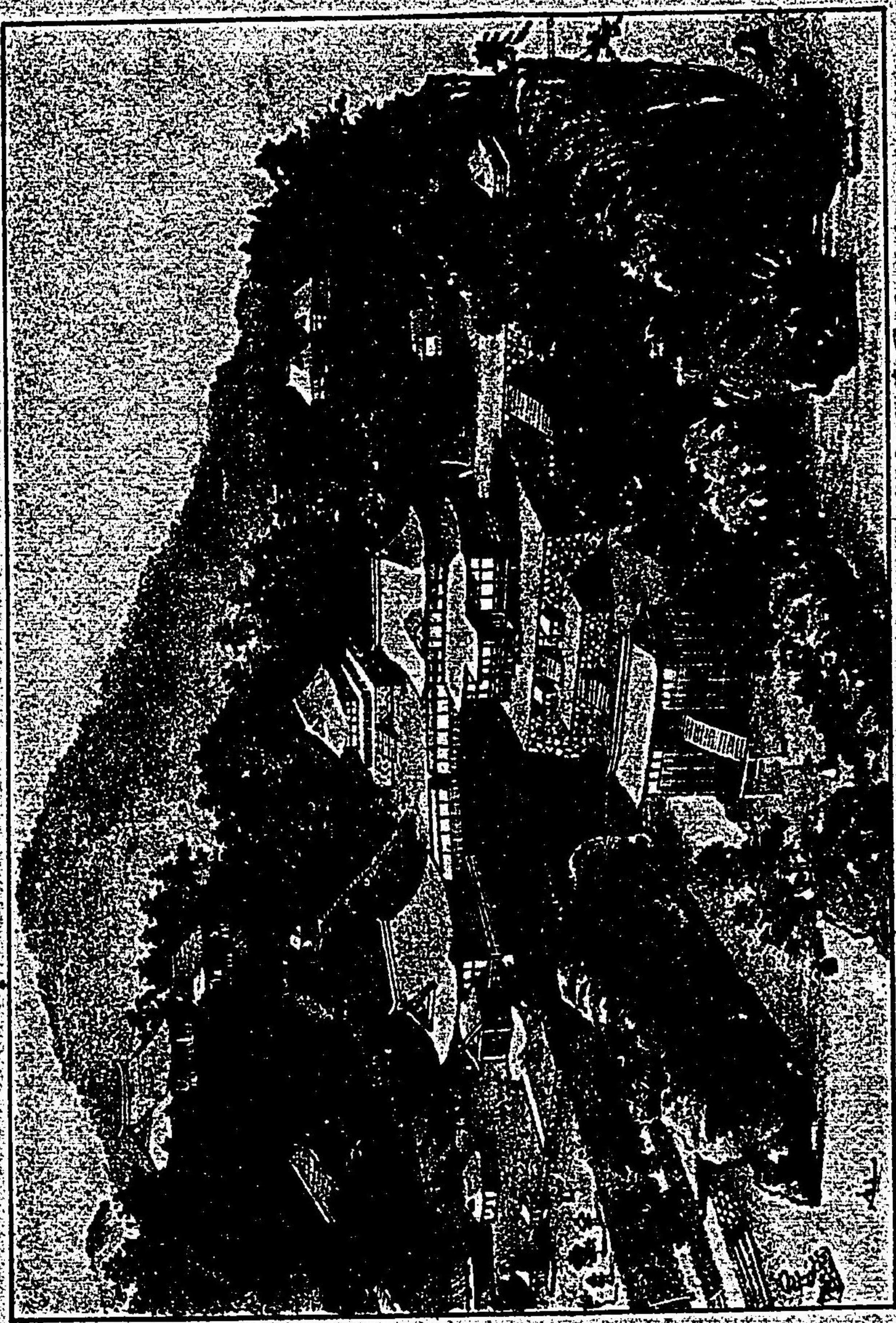
竹生島

竹生島



三十番

竹生島



山國第三十番近江國東淺井郡竹生島巖金山寶嚴寺

あり猶ほ委しく其人を待つべしと云ふ

第三十番 近江國東淺井郡竹生島 巖金山寶嚴寺

當島は金剛輪際より湧きいづる水精輪山にして本朝五奇異の隨一又五つ椿の其一なり人皇七代 孝靈天皇五年近江國地裂て湖海となる十二代 景行天皇十年八月廿四日竹生島湧き出ると雖も實は雲霧開けて初めてあらはれ出ると思へり故に華嚴經十地品に曰く東方に一小國あり國の中に湖水あり湖水の中に孤島あり生身の辨才天女あまに住し玉ふと云々開闢以來辨才天女降臨し玉へど人おれを知らず役の行者神變大士は當島の龍岫に入て種々不思議の事を感じし開座久住し所持の竹杖を島地にさし玉ふにかの竹再び枝葉を生ず故に竹生島と號す今の二吳竹是れなり故に當島は役の行者結界の地と云ふ四十五代 聖武天皇神龜元年三月十五日天皇不思議の靈夢を感じ行基菩薩に勅して辨才天女を祭祀し伽藍坊舎四十九院を建立し千手觀音の尊像を安置し玉ふ故に聖武天皇の勅願所行基の開基と云ふ傳教大師比叡山御建立の時當島の天女出現し我れ永く湖中の靈



あり猶ほ委しく其人を待つべしと云ふ

第三十番 近江國東淺井郡竹生島 巖金山寶嚴寺

管島は金剛輪際より湧きいづる水精輪山にして本朝五奇異の隨一又五つ椿の其一なり人皇七代 孝靈天皇五年近江國地裂て湖海となる十二代 景行天皇十年八月廿四日竹生島湧き出ると雖も實は雲霧開けて初めてあらはれ出ると思へり故に華嚴經十地品に曰く東方に一小國あり國の中に湖水あり湖水の中に孤島あり生身の辨才天女ありに住し玉ふと云々開闢以來辨才天女降臨し玉へど人あれを知らず役の行者神變大士は當島の龍巖に入て種々不思議の事を感じし閑座久住し所持の竹杖を島地にさし玉ふにかの竹再び枝葉を生ず故に竹生島と號す今の二吳竹是れなり故に當島は役の行者結界の地と云ふ四十五代 聖武天皇神龜元年三月十五日天皇不思議の靈夢を感じ行基菩薩に勅して辨才天女を祭祀し伽藍坊舎四十九院を建立し千手觀音の尊像を安置し玉ふ故に聖武天皇の勅願所行基の開基と云ふ傳教大師比叡山御建立の時當島の天女出現し我れ永く湖中の靈

島に住し此山の佛法を守り國家を豊饒せしめんと誓ひ玉ふ大師勸喜の餘り此島を觀山の奥院と崇め玉ふはこれ等の故なり又弘法大師も當島に於て練行し玉ふと多年即ち御所持の錫五銖金剛盤今に相傳せりと慈覺大師は世に辨天の化身なりと云ひ深くこの島の天女に歸依し玉ふ其承和元年の頃大師眼病を病みて久しく癒へず時に天女出現し玉ひ靈藥を授け玉ふと夢み玉へば眼病頓に平癒し修法の壇上を見玉へば天女の尊像忽然として顯れ玉ふ彼の尊像を當島に納め玉ふ今本尊と稱して拜し奉る尊像これなり凡そ開闢以來當島に關する事とは群籍所載の者甚だ多く悉く數へ來れば日も亦足らざるの感あるべし若し詳しきを知らんと思はん者は宜しく彼の書に就て見らるべきなり依てこゝに略しぬ

因に古來扶桑の四辨才天と稱するは即ち相州江の島、越州の嚴島、攝州の實面山及び當竹生島の辨才天なり又當島の三奇といふは其岩石等しく石品の寶珠なるこれ一なり又毎年三月十八日本朝鎮坐の神仙會し玉ふこれ二なり又往古より地震あることなしこれ三なり殊に當島の風景絶美なるは海内に冠たり鄧曲に所謂前略絶頂に在て遙かに湖水を見渡せば比良ヶ嶽の奇峰石山の怪巖

大津の七浦唐崎の孤松云々實に過言に非ざるなり彼の都良香この島に來りて山頂に登り其風光の絶美なるを讚したる詩に三千世界眼前盡と云ふ句を吟じて對句を案じける時御殿の内より微妙の御聲にて十二因縁心裏空と吟じ玉ひし事は普く人の知る所なり元來辨才天女は觀世音の所屬廿八部衆の隨一なり故に如意輪觀世音を信ずれば辨天影現し給ひ又觀音は彌陀を信する輩を擁護し玉ふといふ

第三十一番 近江國蒲生郡長命寺村 姨綺山長命寺

當寺は聖德太子の開基本尊は千手十一面正觀世音三尊一鉢の聖像即ち太子の御自作にて西國順禮第三十一番の靈地なり其由來を原るに聖德太子諸國歴覽の時この山に來臨まししくしに一株の枯木より光明を放つ立寄て御覽じ玉ふに其木に觀世音の種子具に壽命長遠所願成就の文字あり太子難有く思ひ召し此靈木を以て刻ませ玉ふ其時當山瀑泉ヶ谷より光明赫き種々の奇瑞をあらはして一寸八分の閻浮檀金の正觀音の像現じ玉ふ太子即ち迎ひ取り玉ひ尊像の胸の中に製りあ

めさせて七堂伽藍を建立し壽命長久所願成就の字を約して長命寺と名付け玉ひける去れば此本尊を十一面千手正觀音三尊一躰と拜み奉るなり人皇三十九代天智天皇當寺へ臨幸まじく御身づから柳の枝を手折りて御堂の傍に立せ玉ひ朕が所願成就するを得るものならば奇瑞を見せ玉へと詔ありしに此枝一夜に大木となりければ深く敬感まじく天下泰平實祚長久の勅願所となし堂塔僧坊を再興し玉ふ願禮者の八千歳や柳に長き命寺」と唱ふるも聖德太子の八字の文と天智天皇の楊柳の因縁をとり合せたる吟詠なり其後幾多の星霜を経過し堂塔大に破壊に及び香火正に盡きんとせしに賴智法橋小田の明神の示現を蒙り普く諸檀越を勸進して法燈の絶へんとするを繋ぎ堂塔の既に廢れたるを興し玉ふ其後佐々木贈近江權守源秀義七十三歳の時伊豆の國に逆賊を退治して桑楡晚景の故にや遂に討死し玉ふ右大將賴朝卿其忠義を感ぜられ秀義の嫡子武符校尉定綱に命じて秀義菩提の爲めにとて本堂を始め釋迦堂太子堂藥師堂護摩堂寶塔鐘樓仁王門四十餘箇所の僧房悉く再興し玉ひ秀義を長命寺殿久山崇秀大居士と號し明雲大僧正の御弟子尊海法印を中興開山とし玉ふ此時より佐々木正統を六角

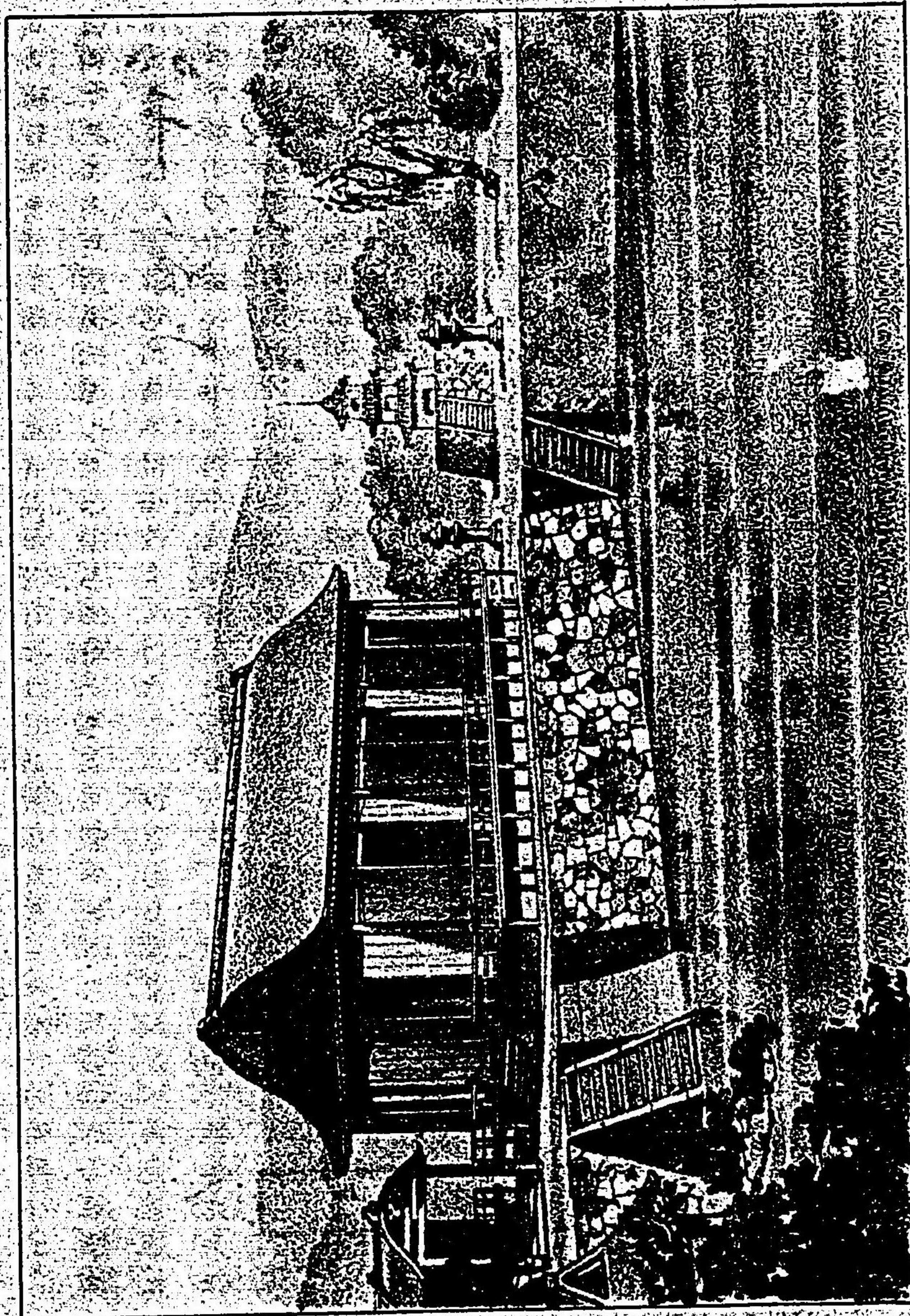
千手觀音
 長命寺
 是の寺
 はふ
 か



めさせて七堂伽藍を建立し、壽命長久所願成就の字を約して長命寺と名付け玉ひける去れば此本尊を十一面千手正観音三尊一躰と拜み奉るなり人皇三十九代天智天皇當寺へ臨幸ましめて御身づから柳の枝を手折りて御堂の傍に立せ玉ひ朕が所願成就するを得るものならば奇瑞を見せ玉へと詔ありしに此枝一夜に大木となりければ深く叙感ましめて天下泰平實祚長久の勅願所となし堂塔僧坊を再興し玉ふ順禮者の「八千歳や柳に長き命寺」と唱ふるも聖德太子の八字の文と天智天皇の楊柳の因縁をとり合せたる吟詠なり其後幾多の星霜を経過し堂塔大に破壊に及び香火正に盡きんとせしに頼智法橋小田の明神の示現を蒙り普く諸檀越を勸進して法燈の絶へんとするを繋ぎ堂塔の既に廢れたるを興し玉ふ其後佐々木贈近江權守源秀義七十三歳の時伊豆の國に逆賊を退治して桑楡晚景の故にや遂に討死し玉ふ右大將頼朝卿其忠義を感ぜられ秀義の嫡子武衛校尉定綱に命じて秀義菩提の爲めにとて本堂を始め釋迦堂太子堂藥師堂護摩堂寶塔鐘樓仁王門四十餘箇所の僧房悉く再興し玉ひ秀義を長命寺殿久山崇秀大居士と號し明雲大僧正の御弟子尊海法印を中興開山とし玉ふ此時より佐々木正統を六角

八千歳や
柳に長き
命寺に
はふ
あや
かき





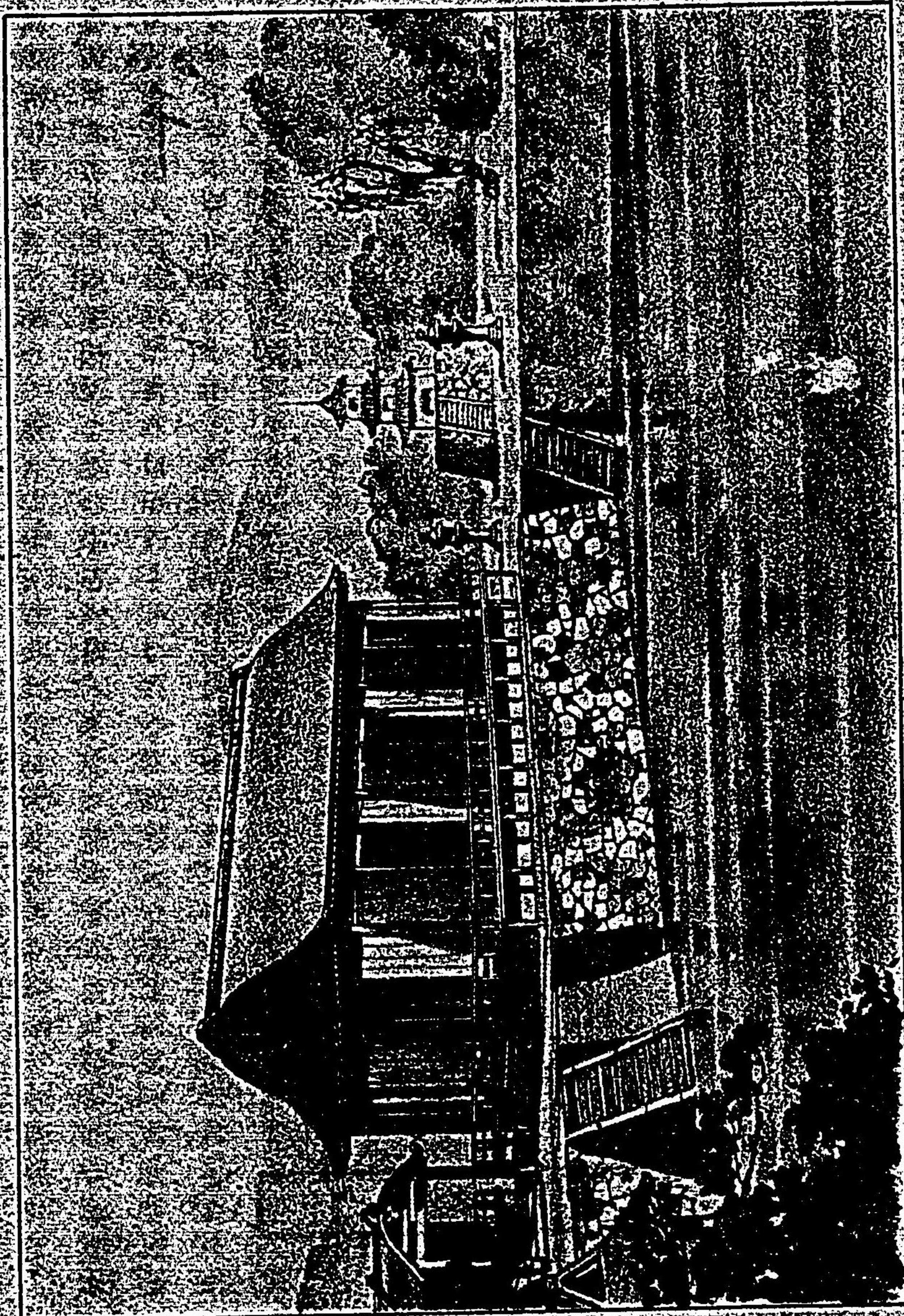
殿と稱し觀音城に住して當寺の崇敬他に異り足利將軍第二代鹿花院殿義滿公當寺の靈驗により病惱平癒し玉ひ即ち御參詣あつて將軍家代々の祈禱所と定め給ふ後奈良院天文八年二月八日院内より出火して伽藍悉く炎上す翌年六角宰相義實卿堂塔悉皆造營し給ふ其後正親町院元龜四年六月岡山の城没落の時其兵火によつて又回祿す同御宇天正十年貴賤親疎を論せず普く諸方を勸進して造營す其外靈驗事跡の如きは枚擧するに遑あらず

第三十二番

近江國蒲生郡老蘇村

繖山觀音正寺

當山へ人皇三十四代 推古天皇の御宇聖德太子の御草創にして西國順祖三十二番の靈地なり其元由を原るに太子は既に救世觀音の垂跡にして支那國にては天台の高祖南岳大師と示現し吾朝に來生し玉ひては 用明帝の皇子と多らはれ佛法を興隆まししく 諸國歴覽の初當山は殊に佛法有縁の勝地なりとて御登山ましまし即ち靈木を以て三尺三寸の觀音を刻み當山に安置し玉ひ又後代のしるしにとて太子自から自筆を揮せ千手の尊像をうつし置き給ふ今の關伽井坊の御影是



殿と稱し觀音城に住して當寺の崇敬他に異り足利將軍第二代鹿花院殿義滿公當寺の靈驗により病癒平癒し玉ひ即ち御參詣あつて將軍家代々の祈禱所と定め給ふ後奈良院天文八年二月八日院内より出火して伽藍悉く炎上す翌年六角宰相義實卿堂塔悉皆造營し給ふ其後正親町院元龜四年六月岡山の城没落の時其兵火によつて又回祿す同御宇天正十年貴賤親疎を論せず普く諸方を勧進して造營す其外靈驗事跡の如きは枚舉するに遑あらず

第三十二番 近江國蒲生郡老蘇村 織山觀音正寺

當山ハ人皇三十四代 推古天皇の御宇聖德太子の御草創にして西國順祖三十二番の靈地なり其元由を原るに太子は既に救世觀音の垂跡にして支那國にては天台の高祖南岳大師と示現し吾朝に來生し玉ひては 用明帝の皇子とあらはれ佛法を興隆まし 諸國歴覽の初當山は殊に佛法有縁の勝地なりとて御登山ましまし即ち靈木を以て三尺三寸の觀音を刻み當山に安置し玉ひ又後代のしるじにとて太子自から自筆を揮せ千手の尊像をうつし置き給ふ今の關御井坊の御影是

れなり扱七堂伽藍並に僧坊三十三軒を建給ふ是れ観音變作の三十三身に擬し給ふ又岩倉の秘所と申て太子自から大盤不ふ諸佛菩薩の尊像をありつけ給ひて後代のしるしの爲めに遺し玉ふ此外靈跡多しと雖も枚舉に遑あらず天曆年中宇多天皇第八の皇子一品式部卿敦實親王此山に居城し玉ふてより當寺の本尊を鎮守と仰ぎ玉ひ崇敬し給ふ事淺からず是れより佐々木氏いよく榮へ當寺倍々繁昌す其後星霜はるかに移りて既に天正十年夏の頃に至て佐々木氏落城によりて當寺も其兵火の爲めに燒燼す見聞の諸人悲歎せずといふ事なし此時に當りて國々の擾亂暫くも止む時なく生民虐政に憔悴する事いふばかりなし既にして一々静謐人々安堵の思ひに住すこれに依て所々の靈場も亦多く復古す當山も格別の靈跡なるを以て徳川將軍より寺院相續の儀に付厚き仰を蒙る其頃勢州桑名の城主松平越中守定綱公も深く當山の廢壞を慨き玉ひ種々の御寄附等ありて厚く僧侶に力を添へ玉ふ故に愈々坊中心を一にし十方檀嚫の助力を請ふて再び本堂を營繕す凡そ開闢以來既に千有餘年香火綿々として絶へざること偏ふ観音薩埵の御威徳赫々として明なり夫れ六大観音の利益勝劣なしと雖も就中千手観音は枯

おきくふか

西國三十三番



織山観音正寺

観音寺

あわ

れなり扱七堂伽藍並に僧坊三十三軒を建給ふ是れ観音變作の三十三身に擬し給ふ又岩倉の秘所と申て太子自から大盤不ふ諸佛菩薩の尊像をありつけ給ひて後代のしるしの爲めに遺し玉ふ此外靈跡多しと雖も枚舉に遑あらず天曆年中宇多天皇第八の皇子一品式部卿敦實親王此山に居城し玉ふてより當寺の本尊を鎮守と仰ぎ玉ひ崇敬し給ふ事淺からず是れより佐々木氏いよく榮へ當寺倍々繁昌す其後星霜はるかに移りて既に天正十年夏の頃に至て佐々木氏落城によりて當寺も其兵火の爲めに燒燼す見聞の諸人悲歎せずといふ事なし此時に當りて國々の擾亂暫くも止む時なく生民虐政に憔悴する事いふばかりなし既にして一々静謐人々安堵の思ひに住すこれに依て所々の靈場も亦多く復古す當山も格別の靈跡なるを以て徳川將軍より寺院相續の儀に付厚き仰を蒙る其頃勢州桑名の城主松平越中守定綱公も深く當山の廢壞を慨き玉ひ種々の御寄附等ありて厚く僧侶に力を添へ玉ふ故に愈々坊中心を一にし十方檀嚫の助力を請ふて再び本堂を營繕す凡そ開闢以來既に千有餘年香火綿々として絶へざること偏ふ観音薩埵の御感徳赫々として明なり夫れ六大観音の利益勝劣なしと雖も就中千手観音は枯

おかしふ

西國三十二番

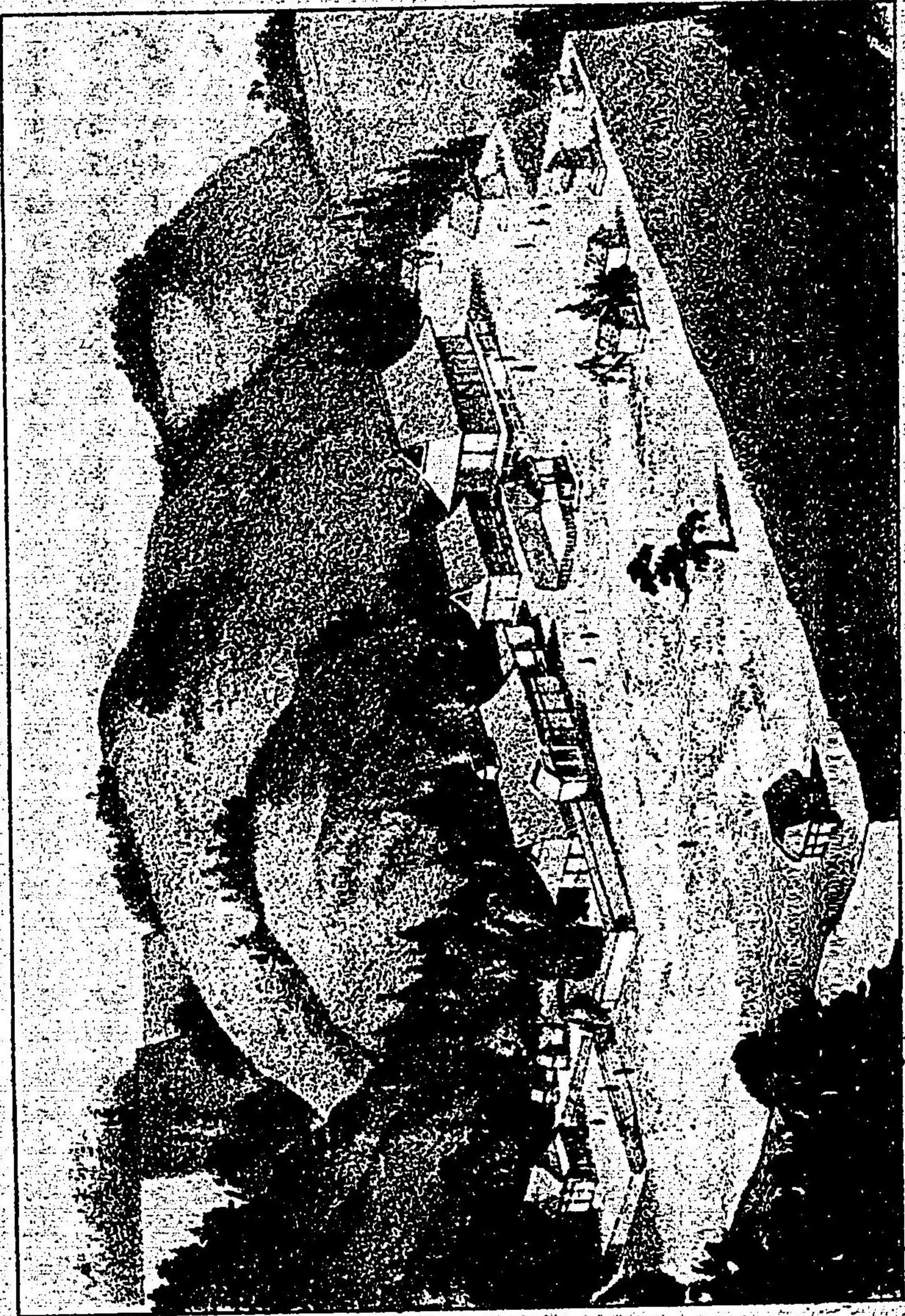
た

観音寺



寺正音觀山織

あわ



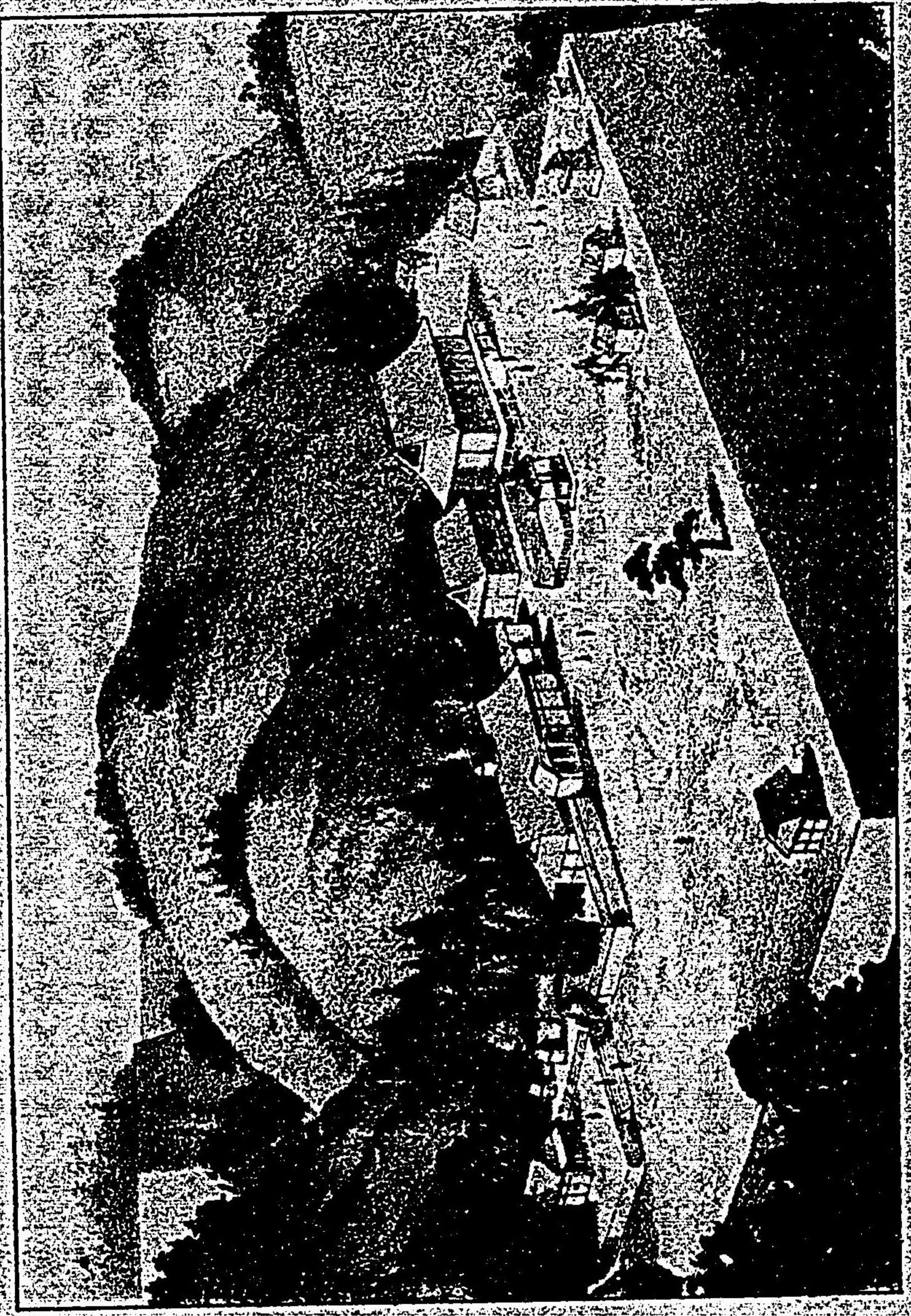
木に花咲き地獄の罪人も我が身にかへて救はんとの御誓ひなれば信仰の輩は今
生にては諸難を免がれ當來にては上品蓮臺に生れて無量の快樂を受けんこと誰
れか是れを疑はんや歸命頂禮を尊とし

第三十三番

美濃國大野郡德積村

谷汲山華嚴寺

管山は人皇五十代 桓武天皇延暦十七年の草創願主大口の大領開山は豊然上人
本尊十一面大悲の像御長七尺五寸御身には六十華嚴經を書し御衣には三千佛を
圖し御袈裟にハ諸尊の形像を寫し奉る靈驗無双の本尊なり當寺の由緒に諸説あ
り今一議を記さば往昔奥州會津郡黒河の里富岡の住人に大口の大領といふ者あ
り常に十一面觀世音造立の志あり爲めに上京三ヶ度に及ふ第三度に當る時東山
清水坂の佛師某の家に至り千兩の砂金を擲ち一擲手半の十一面大悲の像を彫刻
せしむ佛師即ち七尺五寸の皆金色の觀音の像を刻みて是れを與ふ大領敬禮して
云へらく大像を護持して遙々奥州に歸ること誠に大義なりと佛師の云く道中其
煩ひあるべからず汝心安く思ふべしと即ち笠と草履と杖とを以て尊像に奉る尊



山内三十三番立江野郡谷汲山華嚴寺

木に花咲き地獄の罪人も我が身にかへて救はんとの御誓ひなれば信仰の輩は今
 生にては諸難を免がれ當來にては上品蓮臺に生れて無量の快樂を受けんこと誰
 れか是れを疑はんや歸命頂禮あな尊とし

第三十三番 美濃國大野郡德積村 谷汲山華嚴寺

當山は人皇五十代 桓武天皇延暦十七年の草創願主大口の大領開山は豊然上人
 本尊十一面大悲の像御長七尺五寸御身には六十華嚴經を書し御衣には三千佛を
 圖し御袈裟にハ諸尊の形像を寫し奉る靈驗無双の本尊なり當寺の由緒に諸説あ
 り今一議を記さば往昔奥州會津郡黒河の里富岡の住人に大口の大領といふ者あ
 り常に十一面觀世音造立の志あり爲めに上京三ヶ度に及ふ第三度に當る時東山
 清水坂の佛師某の家に至り千兩の砂金を擲ち一探手半の十一面大悲の像を彫刻
 せしむ佛師即ち七尺五寸の皆金色の觀音の像を刻みて是れを與ふ大領敬禮して
 云へらく大像を護持して遙々奥州に歸ること誠に大義なりと佛師の云く道中其
 煩ひあるべからず汝心安く思ふべしと即ち笠と草履と杖とを以て尊像に奉る尊

像これを取り玉ふて自から前に立て徐に歩み玉ふ大領奇異の思ひをなし御供申
 し東をさして下りける途中美濃國青野の東赤坂といふ所にて尊像御腰を傍の
 石にかけさせ玉ひ暫しの間御休みまし〜 躡て彼の石の上に立せ玉ひ北の方を
 さして又歩み玉ひければ大領訝かり申して云く奥州は東の方なり彼れを指し
 て御歩みませと時に尊像の云く我れは奥州まで往くべからず是れより去つて
 五里北の方の山中に有縁の地あり彼の處に往きて衆生を濟度せん汝志じあらば
 我に隨て來れと大領本意にあらざといへども聖勅黙止がたく供奉しけるに當山
 の南丸山と云へる處に至り玉ひ後少しも歩み玉はず其時大領思ふよふ赤坂より
 北の山中に勝地ありと宣ひしは此所の事なるべしと即ち一の精舎を營みて尊像
 を安置し奉りぬ其後豊然上人大口の大領と共に靈夢を蒙り伽藍造立の爲めに地
 を敷き岩を穿ち玉ふに石中より忽然として油湧出し來りければ上人大領共に奇
 特の思ひをなし誓て云く我等此地に於て大悲の像を安置すべし若し廣く來世を
 利し給ば願くは此油益々多からんをと言未だ終らざるに湧き出るよと泉の
 如し上人歎喜極りなく此に於て新に伽藍を造立し丸山の本尊を今の地に移し奉

今すくなく
 美濃の
 谷
 水は岩より出
 たりと
 なる



山 汲 谷

像これを取り玉ふて自から龍に立て徐に歩み玉ふ大領奇異の思ひをなし御供申
 し東をさして下りける途中美濃國青野の東赤坂といふ所に於て尊像御腰を傍の
 石にかけさせ玉ひ暫しの間御休みまし〜臆て彼の石の上に立せ玉ひ北の方を
 さして又歩み玉ひければ大領訝かり申して云く奥州は東の方なり彼れを指し
 て御歩み在ませと時に尊像の云く我れは奥州まで往くべからず是れより去つて
 五里北の方の山中に有縁の地あり彼の處に往きて衆生を濟度せん汝志しあらば
 我に隨て來れと大領本意にあらざといへども聖勅黙止がたく供奉しけるに當山
 の南丸山と云へる處に至り玉ひ後少しも歩み玉はず其時大領思ふよふ赤坂より
 北の山中に勝地ありと宣ひしは此所の事なるべしと即ち一の精舎を營みて尊像
 を安置し奉りぬ其後豊然上人人口の大領と共に靈夢を蒙り伽藍造立の爲めに地
 を敷き岩を穿ち玉ふに石中より忽然として油湧出し來りければ上人大領共に奇
 特の思ひをなし誓て云く我等此地に於て大悲の像を安置すべし若し廣く來世を
 利し給ば願くは此油益々多からんことを言未だ終らざるに湧き出るよと泉の
 如し上人歎喜極りなく此に於て新に伽藍を造立し丸山の本尊を今の地に移し奉

今たゞの親

たの〜おいつ〜

ぬき〜ゆ〜

美濃の

ぬ汲

茶代の

ちの〜と〜に

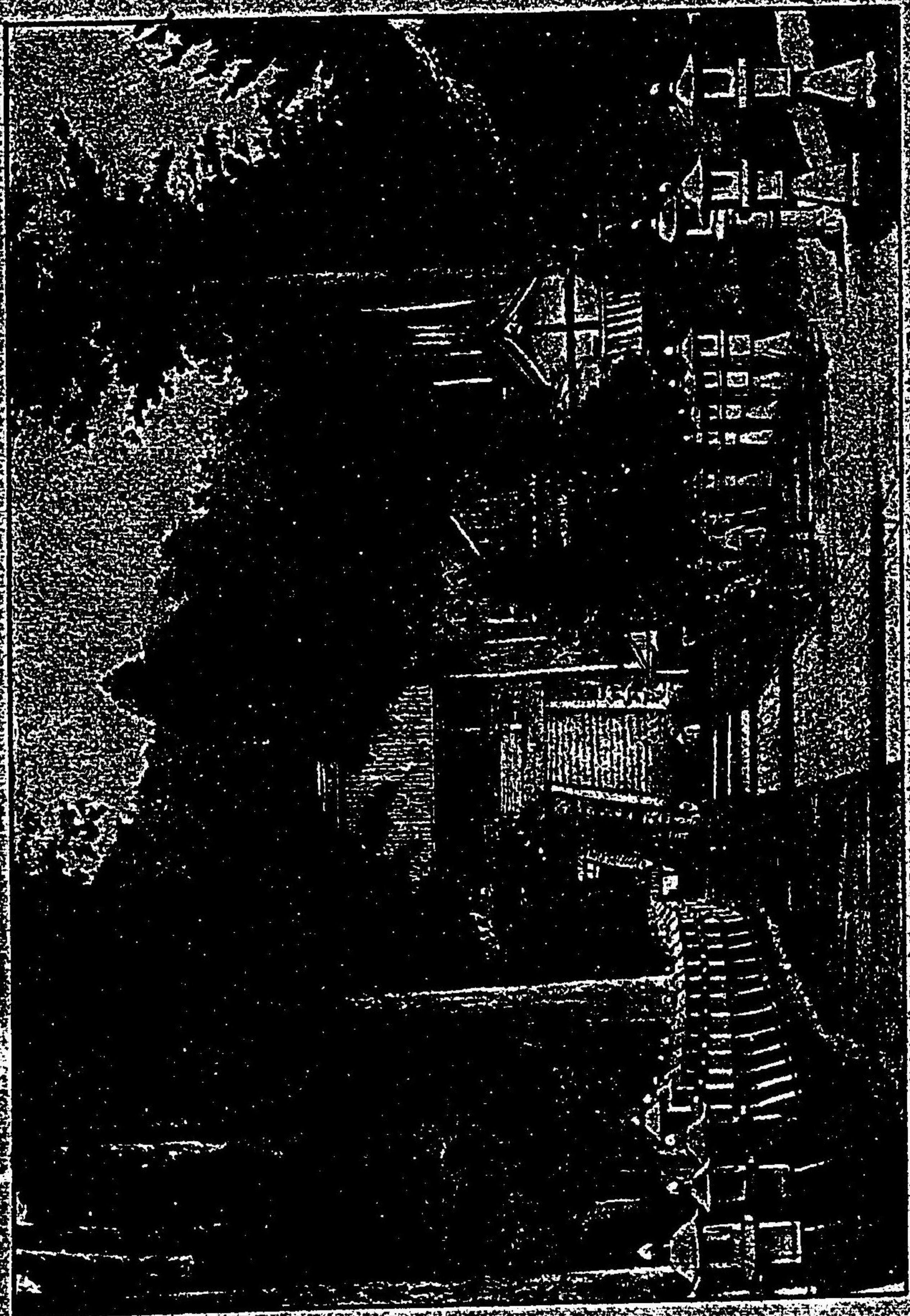
たの〜も〜

水〜苔〜

た〜と〜



山汲谷



り而してより佛閣神祠甍を並べ僧坊民屋軒を列ね即ち大口の大領も當寺の東頭
 に地をトし居住せり又彼の湧出す油を以て本尊の常燈に用ひ坊中も亦其餘瀝
 を受く都出山を改めて谷汲と名く是れより靈驗ますく傳ふ延喜帝瑞應により
 且つ本尊御身に六十華嚴經を書し勅して華嚴寺の額を賜ふ又當寺の觀音は靈驗
 最も掲焉ふして願として成就せざることなし故に三十三所最終の靈地にして花
 山の法皇靈夢を感じ玉ふて長徳元年二月十七日始めて煎野に至り給ひ同年六月
 朔日終に當寺に御參詣在まして
 今までは親とたのみし負摺を脱ぎて納むる美濃の谷汲
 と一首の御詠歌あらせられ御自から御衣と御杖を當寺に納め玉へりそれより都
 鄙遠近の諸人法皇の勅蹤を慕ひ奉り今に至るまで巡禮修業絶ゆることなし又法
 皇の御歌に
 世を照らす佛の誓ひありければまだ燈も消すずありける
 萬代の願ひをこゝに納めれく水は苔より出る谷汲
 とは皆これ湧き出す油に因みて今に法燈赫々了々として永く無明長夜の闇を照



り而してより佛閣神祠を並べ僧坊民屋軒を列ね即ち大口の大領も當寺の東頭に地をトし居住せり又彼の湧出する油を以て本尊の常燈に用ひ坊中も亦其餘瀝を受く都出山を改めて谷汲と名く是れより靈驗ますく傳ふ延喜帝瑞應により且つ本尊御身に六十華嚴經を書し勅して華嚴寺の額を賜ふ又當寺の觀音は靈驗最も掲焉ふして願として成就せざることをし故に三十三所最終の靈地にして花山の法皇靈夢を感じ玉ふて長徳元年二月十七日始めて煎野に至り給ひ同年六月朔日終に當寺に御參詣在まして

今までは親とたのみし負摺を脱ぎて納むる美濃の谷汲と一首の御詠歌あらせられ御自から御衣と御杖を當寺に納め玉へりそれより都鄙遠近の諸人法皇の軌跡を慕ひ奉り今に至るまで巡禮修業絶ゆることをし又法皇の御歌に

世を照らす佛の誓ひありければまだ燈も消ずありける
萬代の願ひをこゝに納めれく水は昔より出る谷汲
とは皆これ湧き出す油に因みて今に法燈赫々了々として永く無明長夜の闇を照

し靈験日々に新なること誰人か渴仰せざる者あらんや

西國音緣起集終

西國音緣起集附錄

巡禮權輿及び中興或問

夫れ西國三十三所觀世音菩薩巡禮に十種の功德あること舊記に見へたり第一に
大火大水横死の難を免る第二に怨賊惡獸毒蟲の難を免る第三に毒藥呪咀冤罪の
難を免る第四に雷電地震落馬の難を免る第五に惡鬼疾病妬怨の難を免る第六に
巨海漂流龍魚の難を免る第七に壽命長久子孫繁榮第八に衆人愛敬諸願成就第九
に諸佛守護浮雲の事なし第十に衆罪消滅正念命終云々原るに本國三十三所巡禮
の權輿は人皇四十四代 元明天皇の御宇養老の始め二月十五日和州長谷寺の開
山徳道上人といへる僧ありて頓かに死して冥途に至る閻魔王に見へ玉へり王の
曰く衆生死して地獄に墮落し常に猛火の内に入り骨を破り髓に徹り叫喚最も甚
し其苦患言語に堪へず知らず本朝に觀音の靈場三十三所あり一度たりも彼の地
を踏みたる者は永く三惡道を免れ十惡の罪人も善處に生ぜんこと疑ひなし若し

斯言虚にして一人たりとも墮獄せば朕及び諸王十王共に彼が苦に代て一切衆生の責めを負はん汝急ぎ娑婆に歸りて王臣諸民を勸めて疾く巡禮をさしむべしとあり徳道重て曰く凡情は疑ひ多し證據なくしては信仰しがたし願くは璽を賜らんと閻王實にもと思し召して實印記文を下し賜ふ徳道隨喜して本土に歸り是れより諸人を勸めて巡禮の法を行ふに信從するもの夥し右の實印は石の函に入れて今に攝州中山寺にありとす是れ迷途閻王の金言衆生得樂の方便なり又順禮縁起に云く往昔迷途の主宰閻羅法皇利生安民の爲めに十萬部の法華經を金泥にて書寫ありけり其供養の爲め慶讚の導師を撰み玉ふに書寫の功終て供養せんふは書寫山の性空上人こそ六根清淨を得玉ひたる法華經修行の行者なり急ぎ請して導師とせんとして召されける性空圖らず閻王の勅に隨ひて迷途に至り法華經供養の修法終りて上人閻王に問ふて曰く娑婆の一切衆生愚痴邪見にして曾て因果を知らず故に叨りに惡業を造りて地獄に墮つ唯願くは方便を以て救濟し玉へ閻王聞し召して即ち偈を書して上人に與へ玉ふ其偈に曰く妻子王位財眷屬死去無一來相親常隨業鬼繫縛我受苦叫喚無邊際云々上人是れを以て衆生に示めせ我常に一

切衆生を愍むこと猶ほ一子の如し或時ハ三使を以て衆生に知らしむ然れども有情愚にして驚かず恣に惡を造りて業に順て此に來る猶ほ業道は鍾の如し重き方へ傾く今日死し來る者二百三人あり其内に極樂へ往生する者は漸く九人あり即ち是れには善人往生の契券を與ふ上人又問ふ今日往生人の内女人なきは如何閻王曰く女人は高慢嫉妬の心甚しき故に往生すること更に少なし上人又問ふ愚僧は死して如何なる處にか生ぜん閻王帳を以て勘みて曰く上人は今まで娑婆に於て人を教へて經を讀ましめ玉ふこと一千百六十部又自から法華經讀誦の其數凡そ八萬六千七百五十餘部又自から稱名念佛の數六百億七千二百四十萬遍あり斯くの如く大善根ある故に直ちに極樂往生あつて佛身を得玉はんあと疑ひなし上人聞し召して喜びて歸らんとあれば閻王此度の御施物として種々の珍器を賜ふ上人見玉ひて我れかくの如きの珍器は人間世界に稀有の物なれば皆て望みなし唯願くは娑婆の衆生の地獄へ來ることを悲む故に一切の極惡人罪深き女人の躰易く極樂へ到り三惡道の苦を免れ侍る事の修行やある教へ玉へと有りければ閻王涙を浮め玉ひて娑婆へ歸り玉ひて勸め玉はんには衆生の善根の第一は修行にあり

り罪は殺生を第一とす口に稱ふるにハ稱名念佛に越たる善根はなし經を持つにハ法華經に勝すものなし罪ある衆生の行業には足を運びて佛國に詣づるに越へたるはなし其中に南閻浮提にハ生身の觀音薩埵移り在ます靈地三十三ヶ所あり靈きに既に長谷寺の徳道上人に告げ置きたり今亦示めさん國數は十二ヶ國靈場は三十三所なり此道場へ一度にても歩を運びたる輩は現世にてハ惡事災難を免れ子孫繁昌し天行病を免れ一切の業障を除き死てハ三惡道へ墮落する事を逃る急ぎ勸めて巡禮せしめ玉へと上人歡喜して本土に歸り諸人に勸め玉ふとず時に人皇六十五代の帝花山法皇は人皇六十三代冷泉院第一の皇子にして御年十七歳にて圓融院の讓を受けて御即位ましく御在位二年とず御遺世の來由に異説あり今暫く一義を記さば永觀二年十月十日御即位の砌にや關白賴忠の娘と爲平親王の娘大納言藤原朝光の娘と三人を召して女御とし玉ひ又其後藤原爲光が娘を召して女御として甚だ御寵愛在まし乃ち弘微殿に置ておれに幸せらるること三千の粉黛顔色なきが如しこれに依て前の三人の女御達是れを妬み玉ひける故にや幾程もなく弘微殿の女御病で逝去り玉ふ是れより帝も邪狂の病の如く只悲

み玉ふて世を棄る御志御座ましける頃栗田の關白の扇子に大集經の妻子珍寶及王位臨命終時不隨者唯戒及施不放逸今世後世爲伴侶といふ文を書たるを御覽じてより猶ほ御遺世の御志彌増し玉ひ遂に寛和二年六月二十三日の夜密かに貞觀殿の高妻戸より忍び出させ玉ふ御供には沙門嚴久といふ僧と藏人藤原の道兼と只二人なり又中納言藤原の義懷と左中辨惟成此二人は御跡を慕ひて追隨す即ち花山の元慶寺にて御飭を落し給ひて其後書寫へ御登山在し發心出家の御事を性空上人に勸あり上人勸答ありけるは帝得度の御事は尋常のことならねば長谷へ參籠ましく觀音薩埵の示現を得て戒師を定め玉ふへしと性空母降とも大和國長谷寺へ行幸あり七日七夜御參籠ましまして大士の示現を請ひ給ふ或る夜の御夢に河内の佛眼禪師こそ帝有縁の導師なり早く得度を乞ひ玉へと親しく示現ありければ直ちに河州石川寺に詣り禪師を師として出家得度を遂げ給ふ尊號を入覺法皇とぞ申奉りき帝の御願満足す佛眼性空の兩師へは報恩謝徳の御爲めに金玉數多賜へども兩師は更らに受けずして報恩謝徳の爲めならば衆生濟度に若くことなし昔徳道上人へ閻魔王より告げありし巡禮修行打ち絶て久しく巡る

者もなし近頃性空上人へ再興せよと命あれば法皇此儀を思し召し來世に傳へ玉
ひなば是れに過ぎたる善行はよもあらじと奏聞しければ叙感斜めならずして然
らば巡禮をすべしと勅定あり時に長徳元年三月十七日第一番に熊野なる那智を
始めとして三上人母路ともに一ヶ所一首の御詠歌に甚深微妙の義を籠めて奉納
あらせ玉ひつゝ次第に巡拜し玉ひて同年六月朔日に終に卅三番美濃の谷汲に着
き玉ふ其間七十五日とぞ是れなん彌陀觀音勢至權化の佛菩薩末世の我等を救へ
んと大慈大悲の方便に生死の苦海を渡し玉ふ是れ巡禮の中興なり其後百八十年
餘を過て承安の頃後白河法皇ハ熊野權現の神託を受け玉ひ再度中興遊ばさる此
時法皇の御同行三千三百餘人とぞ花山法皇の蹤を繼ぎ杖笠負担草鞋にて彼の奉
納の御詠歌を唱へて巡禮あらせらる十善天子の御躬にて末世の摸範となり玉ふ
あれ三度目の中興とぞ夫れより今に諸人等しく皆法皇の叙蹤を慕ひ都鄙遠近巡
禮せり札を納る事は後人の信心激發せん爲めにや又巡禮して其奇蹟を窺ひし事
も少なからず過ぎし延寶の頃なりとか美濃國大垣に老若男女多く巡禮を思ひ立
て出けるに一人の童女あり其姉の巡禮するを羨しく思ひて父母に告げて姉妹と

もに巡禮せん願ふ然れども父母許さず姉は年も長たり汝儘かに十五歳幼稚の
身として長途の旅は心元なしと達て留ける故に參ること叶はず娘悲み歎きて朝
暮の食だにも曾て食せず次第に疲せて終に死たり父母大に悲み彼が願ひの如く
巡禮を許すべかりけるものと後悔すれども其甲斐なく涙と共に彼れが拵置き
たる負摺と札とを首にかけさせて墓なき野邊に埋みぬ姉は早二日路も出けるに
妹跡より追付來りて云く父母は免しなかりけれども餘りの本意なきに忍びて出
で來れり重て親達の怒り玉ふことありもせば宜敷姉上のとりなしを請ふにと
いひて潜然と啼きけり姉も哀れに思ひて能くこそ來れり觀音の御利生にてさの
み怒り玉ふまじと伴ひて巡禮しけり大垣にてハ七日々の吊ひをなし日數の重
るに彌々歎き増りて父母ともに叶はず歎きを筑紫船のとも消なんものをとぞ
悲めり去れども父母は互に心を取り直し且つは諫め且つは慰め彼れが幼心に巡
禮の志深く負摺札まで用意したる事世に觀世音の大悲なるよもや惡道へは遣り
玉はじ佛果を得るは疑ひなからん兎にも角にも菩提を吊ふ外はなしと中陰の内
も僧を請して随分の追善を勧めけるかくて月日に關守りなく七十五日に當る日

に巡禮の輩皆々歸りける其中に彼の一度亡せたりし娘も姉と共に歸りければ父母は餘りの嬉しきに是れは夢かと娘に懐きつき歎きて其場に伏しまろふに姉はつやく合點ゆかず二日後跡より來りしと語るに父母は死して葬りし事を語り出でなを不思議なる事共なり是れや全く觀世音の御方便ならんと喜憂こもく相伴ふて急ぎ墓を發き見たるに桶の中には死體はなくして巡禮札と負摺のみ餘りの不思議に娘に問へば唯何心なく一心に巡禮したしと姉を慕ひて行きたるなりと答ふ父母も感涙止み難く諸人も聞て呆るとばかり俄に信を起しつゝ巡禮する者多かりけるとか是れ聖德太子の片岡の飢人の死したる地を發き玉へば全身脱去して紫の御衣のみ残り居りしこと太子傳に見ゆ元より同席の奇談なり末の世と雖も斯る尊き例も多かるものを豈人ごとく巡禮の本志を遂げざるべき嗚呼斯る現證も残りぬれば謹み畏みて皆共に巡禮すべきことにこそ今や限りなき薩埵の御誓願は限りある小冊子に載せ絶すべきものにあらず正に筆を擱かんとするに際し願くは一切衆生と共に菩薩の慈眼を垂れ給へと云ふ耳後の看ん人其訛謬遺漏を補正し玉は幸甚

一心奉修依此功德觀自在尊護持行者
我從無始三業所犯一切罪皆悉消滅

西國觀音緣起集附錄終

跋

明治のはたとせあまり六ばかり衣更着の十七日といふに慈眼
會のあろむ勝沼の大人をどぶらひまつればよくぞとてひかれ
つなにいふとのありてにや何用ありて來にけるぞと折り返し
てのたまふ己れ用もなけねばと答らふにことやうなる申され
方よとて笑ひつぶれぬ大人のいふ用なきこそさち多けれこの
すり巻に如何にものしてよとて出さる見れば縁起集とかひつ
けて侍るがくりひろぐる程にくさくのたふとき法の物語こ
そ出づめりなまむひにいひがひもなきとものしてあたら愛で
たきふみよごさんよりはといひてあまたとひ呑みけれども中

々に許し給はずさればとて己のが胸にうかひ来るまに／＼こ
たひの大人たちがつどひのいと愛でたきをのべもしわけて己
のがひとりのためにとてはせて普く人のためにとての御事を
あはれなるなべてこのふみにものしつる物語最といたふ多け
れどもおほかた己のが身の危うげなるに肝をひやし世に苦
しき時のかみだのみならぬはあらぬに大人たちのつどひこそ
これにはうらうへなる御佛の申しのこされける平等なんどに
も深くかよひて彌やが上にもたふとけれ聽て三十三どころの
御寺の縁起てふものゝ文字古びにふるひて新たに撰りかゆる
時も來らむにはみそみ所のみ寺は擧ひにこそつて大人たちが

こたひのことかゝめやも已れもし命ながふしてかゝるふみ集
めうるものありもせば今は昔し大垣の町に勝沼なにがしとい
ふ人ありけり縁起のはじめにものしつらんを今からにたの
しみて待るといへば大人をばじめ居合せつる人どちも笑ひつ
ぶれぬ已れこれかひつけんにといへば大人はきかず小夜更け
て睨きる己のが田の落し水も如何にとのたまふをしひたげて
いふにさがなき嗚呼のわざにあらぬは已れその笑ひをかうぶ
らんにとてかくはものしつ佛もしあはれみ今にしても彌ちこ
ならむには同じくは己のが筆の病ひなほしてよと

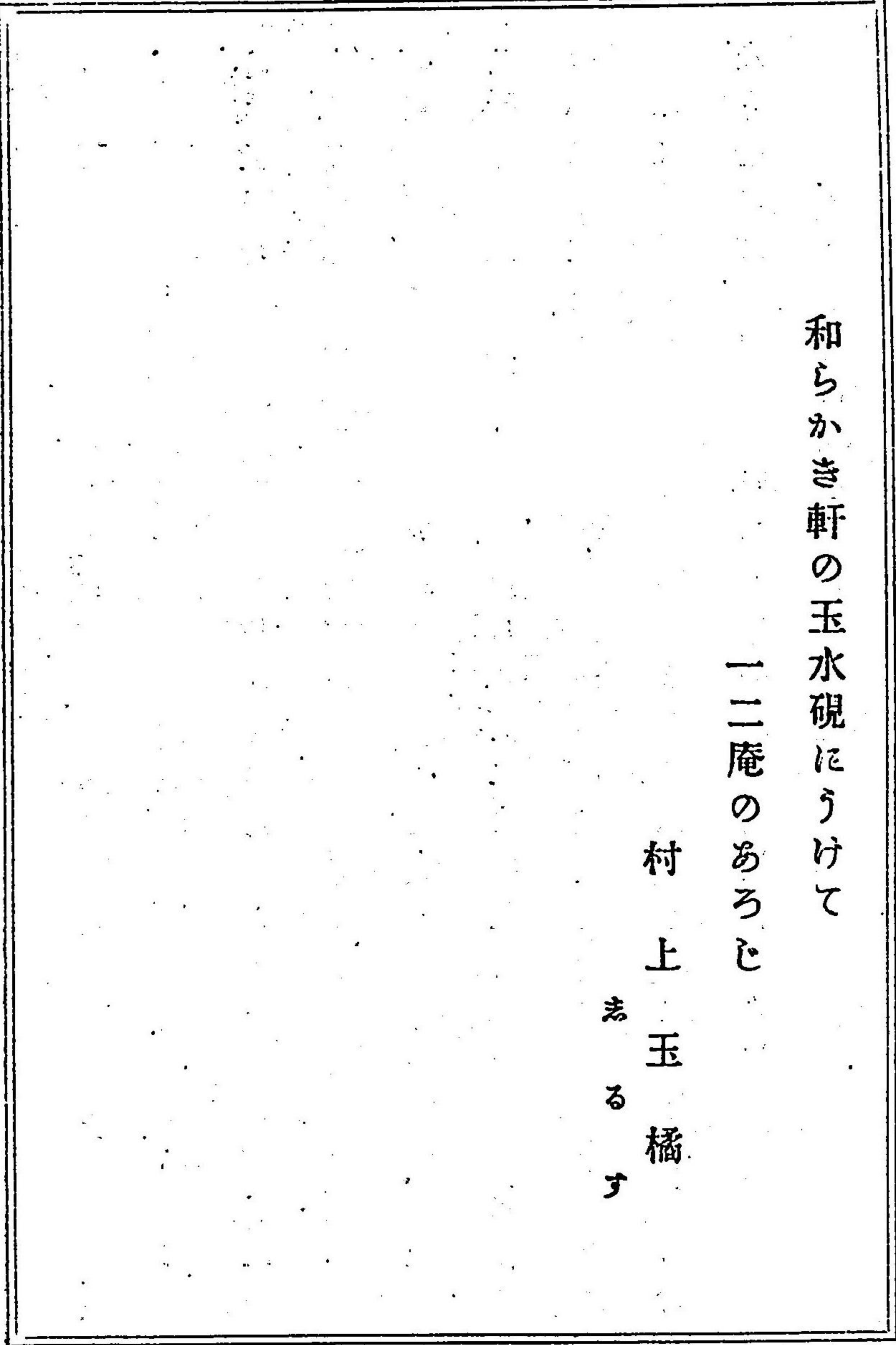
寛の水音しぬる雪解けの朝

和らかき軒の玉水硯にうけて

一二庵のあろと

村上玉橘

まゐるす



明治廿六年三月二十日印刷

明治廿六年三月廿七日出版



編者

西尾 村 昭

定價金貳拾五錢

版權登錄



印刷人

齋 藤 章 達

發行

勝 沼 武 一



印刷所

紙 分 社

石版挿畫印刷所

泰 錦 堂

東京々橋區西紺屋町
秀英舎石版部

東京市日本橋區兜町
一番地

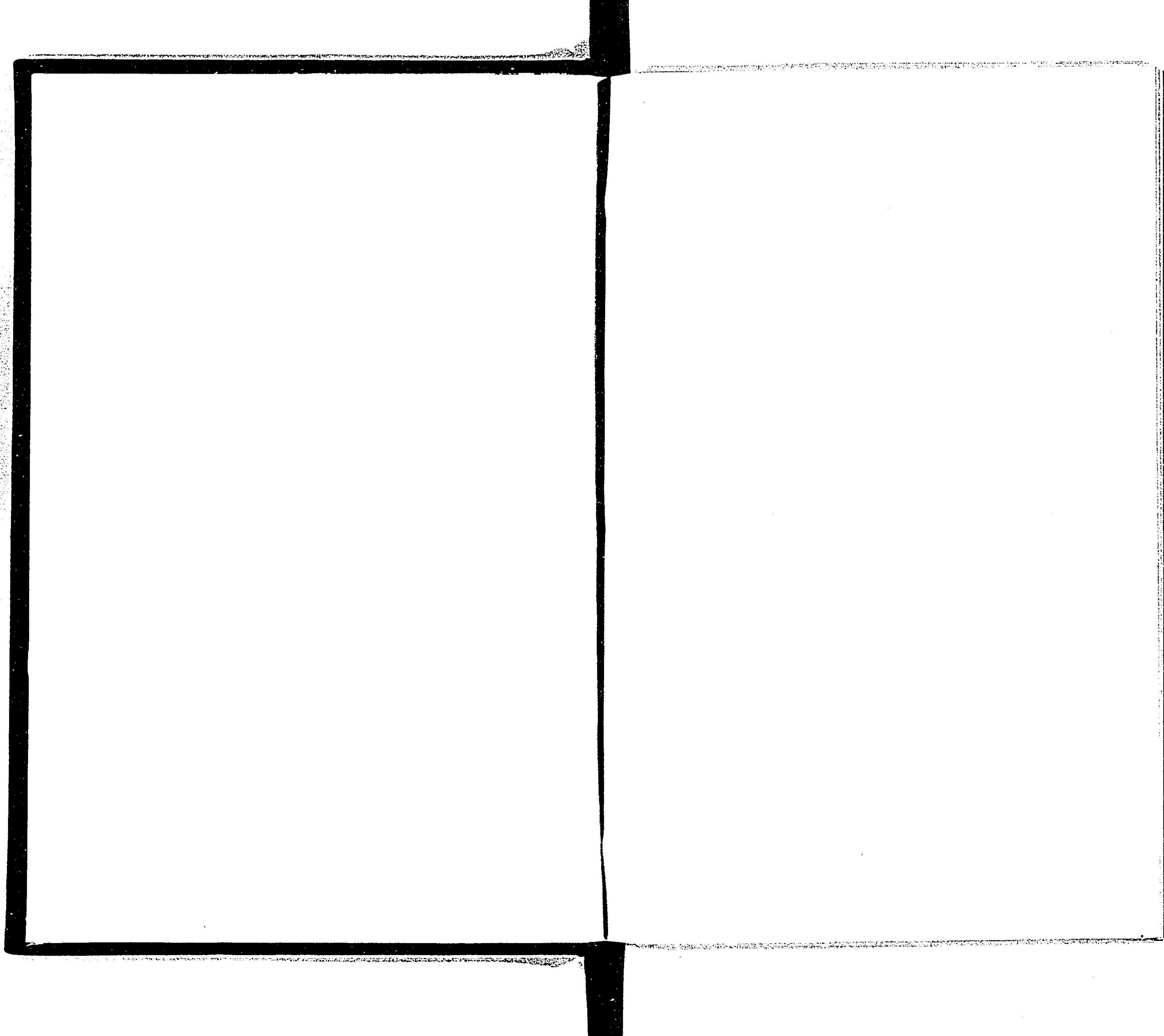
岐阜縣安八郡大垣町
傳馬十五番戶

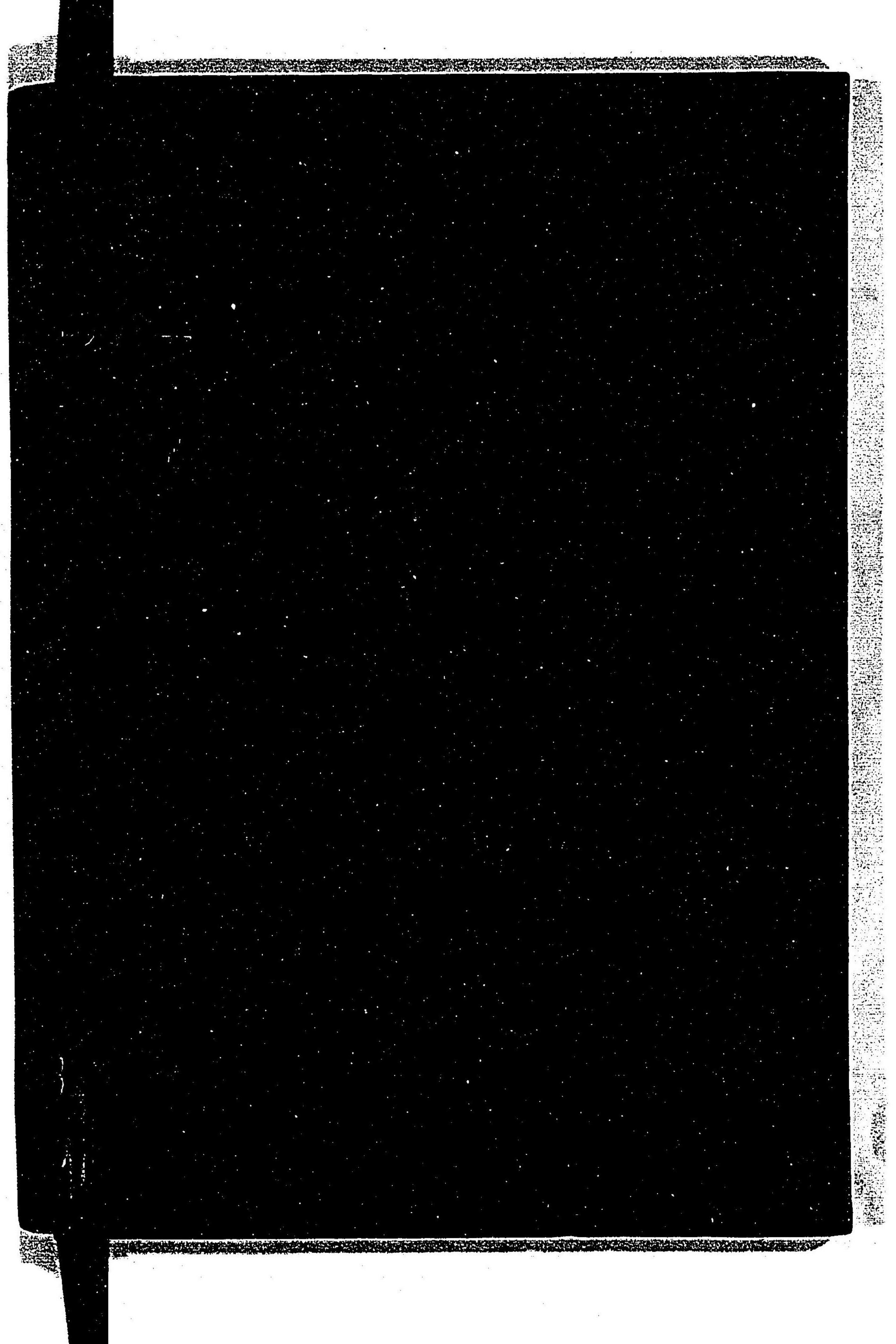
東京市日本橋區兜町
一番地製紙分社

松 尾 學 一

岐阜縣安八郡大垣町
傳馬十五番戶

213P85





43

220



016131-000-8

43-220

西国観音縁起集

慈眼会/編

M26.3

ABC-2001



